
ゲッター? 蓬莱幻想

廣瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲッター？ 蓬莱幻想

【Nコード】

N5455Y

【作者名】

廣瀬

【あらすじ】

時空軸の違う東京への集団遭難と、遺恨を残した友人たちの死から二年。平安ゲッターで高等部一年の春を迎えたリヒト、ミサビ、テッセン、そして、彼らと和解したミュー。リヒトは家族と再会の日を待ちながら、転生の理由となった京都でのできごとに悩んでいた。いっぽうテッセンは、留学した蓬莱ゲッターで、かつて自分が否定した“魔法”を現実にしようとする研究者と出会う。ゲッターの存在意義が問われる一年の幕開け。魔界へと変貌をとげはじめる世界で、隔離自治区と現世と天使たちの関係の、新たな局面は。

1 春雷

「ひとりの科学者の夢が、百万の無辜の民を殺す。ノーベルやライト兄弟、アインシュタインの轍を見よ。彼らの技術がもたらした、おそろべき結果を見よ。そこかしこ、無数に積み重ねられた民衆の死体——これこそが、彼らの夢の暗部が抱えた汚点である。これからのちの科学者たちよ、お前たちがもしも世にもあえかなる夢を見たとして、重々承知しておくことだ。もう一度、同じ道を通るわけにはいかない。人外よりもたらされた力を研究する以上、その危険の上に立つことを自覚しなければ。私たちの野放図な夢こそが、まさにこれから世界を滅ぼすのだから」

—— L・S・V E N E S T R O M “魔的粒子研究誌” より

*

春が出会いと別れの季節である、という考えは、ここ、蓬萊市にはない。しかし、彼にとつて、今年の春こそがまさにそれだった。いや、出会いと別れ、というよりも、それは別れでしかなく、別れというには、それはあまりに納得のいかないことであつた。

「××××××××！ ××××××××！ ××××××××！！」

テーブルを叩いて罵詈雑言を吐き散らかす。それを聞いた周囲のひとびとが、あわてて慰めの言葉をかける。ここで彼が手にしているのに相応しいのは、ワイングラスかビールのジョッキか、ということである。背景が、薄汚れたパブならなおいっそう絵になつただろう。

しかし、残念ながら、そこは真昼間のカフェであった。周囲にいたのも、友人ではなく、迷惑そうに顔をしかめた店員たちだった。「大丈夫かい」「ほどほどにしてくれよ」——彼らは、真昼間から研究所の職員がここでくだをまいていることを不思議に思ったが、スチュアートのことを、まあまあよく知っているのです、いつもの気晴らしの一種だろうと考えた。最後は「お静かにねえ」と、豊富なバストの女性店員に、軽く注意をさせるだけでほうっておくことにする。ほうっておかれたスチュアートは、さきほどよりいくぶん音量をおさえて、再び、上司をのしる。

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……！」

もうすこしだったのに。

彼の頭をずっと駆け巡っているのは、その一文だった。

もうすこしだったのに。あとすこしで世界を変えられたのに。あと少しで。

いったい、何が悪かったのだろうか？

コーヒで酔うわけではないが、体内をかけめぐる激情が、それに似た効果をもたらして、すれに彼はぐでんぐでんである。酩酊のいきおいで頭をテーブルにぶつけながら、いつ終わるともない呪詛を吐き出す。

どのくらいだったころだろうか。春風が身にしみるほど寒くなってきたとき、ようやく、彼のもとへよく知った人物がやってきた。

「ハイ、老師。ゼンマラ（どうしたの）ー？」

元、後輩の女性である。今は、大学で事務をしている。仕事帰り、という格好の彼女——小麗は、彼の隣に腰掛けて、プーアル茶を注文すると、かわいらしく首をかしげた。彼女は、かつて米国へ亡命したチベット民族の子孫である。目の前の若い男が、かつて先祖を虐待した漢民族の末裔であると知っていたが、なんとなく憎めなかった。それは、この男が、過去を気にせず未来だけをみる科学者であったためかもしれないし、今見せるような、直情径行の様子が、

ひとを心配にさせないではおかないから、かもしれない。

それはそれとして、スチュアートはそれを聞くと、理解者を得たとばかりに、がばりと顔を起こして手をふりまわした。

「聞いてくれよ！」

しかし、その顔で、事務にしておくにはもったいない、と言われる小麗はすべてを悟ったらしかった。

「ああ——ついに潰されたの」

はつきりと他人から聞いて、スチュアートはまたテーブルにつくぶした。小麗はあわてて鞆をさぐり、

「老師。しっかりして。大丈夫よ。ねえ——あ、そうだ、クッキー食べる？ お好きでしょ、チョコチップのクッキー。私、昨日焼いたの」

「おお……ジーザス……」

彼の所属する魔的研究所蓬萊支部は、他の支部と同様、ソジ粒子発見にともなうて続々と見つかった未知の粒子——総称して、それらを魔的物质と呼んだ——の、研究をしている。関わっただけで命を落としてしまったため、人間には扱えない。羽化転生した彼らだけが研究できる、いわば独占業務だった。研究の過程で副次的に得られる技術の応用が、それぞれのゲッターがあげる収益のうち、かなりの部分を占めたので、魔的研究所の各支部はいわば、それぞれのゲッターにおけるフラッグシップであった。

さて、彼らの在住するこの蓬萊市は、名前だけ見ると、アジア圏に存在するゲッターのように思われる。しかし、そうではない。蓬萊ゲッターは、米国在住のアジア系転生者のために設立された、米国にあるゲッターであった。特に、他国へ移住しても頑として自国の文化を保持し続けた、中華街、朝鮮街出身の住民が多い。そこにわずかに日本やシンガポール、マレーシアなど東南アジア人種が、欧州アフリカ圏からも合流する。もつとも歴史の新しいゲッターとしても知られている。

上海とか、香港とか、広州とかマカオとかの地名がつけられた区

に、五千人程度が暮らしていた。所在地米国の属する大西洋連合の、アトランティック・ユニオン第六のゲッターとして数えられたりもする。

チャイニーズ・スピリッツとアメリカン・ドリームがキメラのごとく、一つの町の中に特徴をみせる。今、彼らがいるのはカフェであるが、その両翼には茶館もくっついて、カフェ・ラテやバドワイザーや烏龍茶や茉莉花茶、もうもうと湯気をたてる蒸籠の点心などがごっちゃんになって売られていた。

「それで、今度はどこの部署に行くの」

「簡単に言わないでくれ。私は——私は、あきらめきれないんだ」

「でも、予算がもうもらえないでシヨ。それが、老師。老師なら、よそのゲッターの支部に移ったらいいじゃない。ヒクテアマタでしよう」

「駄目なんだ。くそ。所長が——所長さえそのままなら」

去年、蓬萊支部の所長に、新しく、スチュアート・ヒルガーという男が就任した。元、大手新聞社の会長を務めていた人物である。

彼は、無駄な経費と人員を削減するために、金にならない研究からとつと撤退することをはじめ、この春、ついに、その魔の手がスチュアート（いまましいことに、彼は、所長とファーストネームが同じである）の部署にも及んだ。いわく、経費ばかりかさんで結果が出ていないから。実用化には程遠いから——たしかに、スチュアートの部署は金も人もよく食った。本当なら真っ先にきられていてもおかしくなかった、ともっぱらの、所内の噂である。しかし、部外者であつても彼らを必死にかばい、まもろうとした人間が多かつた理由は、彼の部署が、この先の世界を変えるかもしれない、最先端の技術を研究していたからでもある。研究者にとって、世界初とか、業界初、とかいうのは、命にもまさる名誉だつた。ロマンだつた。夢だつた。結果が出ていない、と言われればそれまでだが、その結果まで、スチュアートのみるところ、あと一步にも迫ろうとしていたところだったのである。もう少し待ってくれよと彼は言いたかつた。だが、その声が届くことは無かつた。

かくして、スチュアートは、コーヒーカップを手に酔っ払うのである。

「自費で——自費でできないことはない——」

「でも、次の新しい部署のトップになるんでしょ」

「私のやりたい研究ではないんだよ。惜しいところだけだね」

「でも、そっちのほうがお金になるんでしょ」

「最初からお金目当てで研究する科学者なぞ、科学者ではない。そんなものいるか！」

「ふうん。で——あと、何が足りなかったの？ もうちょっとだった、って」

「そりゃ——最後の実験に協力してくれる、人、だよ。動物実験は済んでいたからね。そうだなあ——気力体力ともに充実して口が堅く、うちのデータを持ってよそに逃げたりしない、誠実な——そうだな、軍人ならいい。一番いい。蓬萊ゲッターの軍人なら。そう思っ、て、人選しようとしてたんだよ。その矢先のことだった——あのヒルガー、鼻持ちならないやつが」

「でも、申請書があるわ。今となっちゃ、軍が許可してくれないと思う」

「連合ゲッターは？」

「もつと無理」

「蓬萊の学生」

「さらに無理」

小麗は、すましてプーアル茶のマグカップに口をつけ、スチュアートはがっくりと肩を落として、クッキーをほおばる。

「近い研究やってます、ってことで、こいつをデコイにするか——チーム自体が身売りされなかったただけまだ良かった。しかし、そうすると月例発表をどうするか——」

もそもそと呟くスチュアートを、小麗は同情の目で見た。

ふと、彼女の脳裏に、奇術めいた策が浮かぶ。

「ねえ老師。なら、こんなのは？ 要は、最後の実験に協力してく

れる人がいればいいわけよね。ちょっと危ないかもしれないけど」
「ん？」

「他国からの留学生はどうかなくて。お金でなんとかなるかもよ」
「留学生——」

「大学で、誰か適当なのが見つかるかもしれないわよ。いや、大学じゃ、自分の租界の思想にどっぷりつきすぎてるかしらね。高等部——まで範囲を広げるか——」

「あんまり頭がよくないほうが助かるね」

「ぼんやりと、考え込みながらそう言ったスチュアートだったが、だんだん、小麗の言葉が脳裏に染み入るにつれて、希望がわいてきた。」

——ありかもしれない。

彼は、すばやく計算をめぐらす。

今、彼はピンチにあつた。元、同僚のなかには、彼らがこれまで蓄積してきたデータを持って、よその、同じ研究をしているところへ移籍する、というものもある。もしもそのデータがわたつたら、彼らがどこまで事を成していたか、どういったアプローチをしていたか、ほかの支部のライバルたちに、たちどころに分かつてしまうに違いない。

ほんの一秒論文を出すのが遅れただけで、その功績が他人のものとなる、というシビアナ事実は、20世紀科学者のあいだに浸透して以来の常識だ。今、スチュアートは、誇りをかけてそこに立ち向かおうとしていた。

彼の故郷、中国——いわずとした古代中国は、羅針盤、紙、印刷術、火薬を生み出した、大いなる発明の国であつた。それが、二千年のちには、他国の眉を曇らせる、模造品の最大産出国となつていた。そこから名誉を挽回するのに二百年、自国での研究体制を確立するのに五十年。いまや、中国は、アメリカ、インド、日本と肩を並べる科学の国である。生物学の範囲で、今回はイギリスとも並ぶかもしれない。

変化した、元、中国人の大きな野望は、今、散ったかに見えた翼を再び得ようとしていた。

「ようし、やってみるか。となれば、用意は周到にこしたことはない。そうだ……私が、最初に世に出す——見ていてくれ、小麗！私が、世界で最初の魔法使いだ。私が、科学を魔法に変える！イツツアチャイニースピリット！」

「老師、がんばれえ」

たったひとりの拍手と協力のために、世界がコペルニクスの転回を迎える、ということも、やはり、奇跡の一端である。技術が飛躍するとき、たまには、こつこつとした実証の積み重ねではなく、まったくの偶然からなる、ということもあるのだ。曼荼羅のように複雑な人の動きと時間の流れが生み出す魔法が始まろうとしていた。

そして、そこにまきこまれてゆく留学生はというと、今——

春、平安市は、満開の花に埋もれていた。平安市、というこの場所に、もしも人格があったなら、あまりにも華やかに装った自分の姿にほほを染めるだろう。雪解けして久しいこの町でも、なんといつても、春の訪れをはつきりと感じさせるのは、やはり、花卉のひとつひとつがピンクの水晶に色づいて咲き誇る、桜であった。そして、それが終われば、新芽の芽吹く卯月の終わりから、すがすがしい皐月の晴天に、繁栄の緑が透かし模様をつくる。緑陰はまだ熱を持たず、静かな冷たい風がさわやかに駆け抜ける。

その、平安市にある平安学園高等部。近代的なづくりの建物のピロティには、ついさっき、試験を終えたばかりの学生たちが、ぞくぞくと現れて、立ち話をしていた。そのなかに、三人の男子学生と女子学生がいて、なにやら熱心に話し込んでいる。一人は、とびぬけて背の高い、体格のいい、ワイルドを絵に描いたような人物。二人目は、やや茶色がかった髪に秀麗な、優しげな顔立ちの少年。三人目は、身長も体格も、一人目と二人目の中間に値する、どこことなくエキゾチックな雰囲気のある少年である。香るような異国情緒以外に特筆すべき点はないが、闊達な様子が目をひいた。そして、彼のそばに静かに寄りそう少女はというと、あたるをさいわいなぎ倒す、どこことなく恐ろしくなるような、人間離れた銀髪と美貌の持ち主だった。

「ぜんぜんわからなかったな」

べつに後悔するふうでもなく、乾いた声で呟いたのは、ワイルドを絵に描いたような——テッセンである。銀モールのついた学ランの襟をはずして、やれやれというように肩をまわした。ずいぶん伸

びた髪を、雑に後ろでひとまとめにしている。

「俺も、ぜんぜんわからなかった」

情けない調子で言ったのは、エキゾチックでいつも元気——リヒトである。幼さを抜けかかった青年の顔つきで、同じく、襟をはずす。

「身体髪膚これを父母に受く、あえて毀傷せざるは孝のはじめなり？　だったか。これを平安人の立場から反論せよ——ミサビ、なんて回答した？」

「“一切衆生^{ひと}齊しく父母の恩のごとく深しと思いて、なす所の善根を法界にめぐらす。別して今生一世の父母に限らず”」

「なにそれ、どこからの引用？　どういう意味さ」

「正法眼蔵隨聞記——すべての現象を、両親から受ける愛情のように深いと思って、行動を良くしなさい。孝恩とは、特に、生みの父や母に対してたてるものとは限らない。」と

「あ、私も」

ミサビの答えに、ミューもうなずく。

「課題図書だったね。一応、覚えておいたんだけど」

「これだから優等生は」

ねえ、とリヒトとテッセンは顔を見合わせた。テッセンは「けつ」と吐き捨てると、

「こちとら演習帰りだからな。ぐちゃぐちゃ引用だの暗記だのは性にあわねえや」

不勉強のいいわけをした。

「でも、書くことは書いたんでしょう。なんて反論したの？」

リヒトが尋ねると、興味深そうに、ミサビも目をしばたかせる。

「俺は毀傷してないから関係ねえって」

あごをそらし、にやりと、自分の胸を親指でさす。

「あ、そう」

たしかに、彼は、生まれながらの平安人だ——テッセンは、四月

の半ばから二週間にわたって、類？、と呼ばれる区分の生徒の必修授業に参加していた。亜空間にとんで、仮想敵を倒す実践授業である。この類の授業が、特に、前衛と呼ばれる進路を希望するものは激増する。授業を終えてさらにひきしまった横顔を見ながら、いいなあ、と、正しい言い訳を持たないリヒトはため息をつく。彼は類？——医療、農業、芸術系に属する生徒である。後衛、後方支援組で、主に補給について学んでいる。同じく、類？に属するミューが「大丈夫だって」と慰めるように肩を叩いた。

「補修になっても、私がいるからさ。ね——リヒト」

「ああ。頼むよギン」

「まかせて」

ちつ、と、あまり聞かない舌打ちがしたほうに二人が顔を向けると、ミサビはにこにこしている。

「僕も教えてあげるからさ。ね、テッセン」

「あー、うるさいうるさい」

テッセンは、しつこいハエをはらうように肩に置かれた手を払った。彼の眉間には、深いしわがいまだに刻まれている。ミサビは、それ以上深くは追求しなかった。

ふと、誰の口からも言葉が失われる瞬間。

四人が一度に集まるのは久しぶりだった——それこそ、共通テストでもなければ、あまりに授業の内容が違うので、話も合わない。

あの事故から、一年と半年がたつ。

「このあと、どうする」

「ミューは？ このあと、用事があるって言ってだろう」

「女子寮で、寮内会議なの」

目をきらめかせた彼女の襟にもまた、高等部一年の学年章がある。結局、あの事故からまる一年、彼女は眠り続け、宣言どおり、リヒトたちの同級生となってしまった。はからずも同級生となった元・下級生たちの驚きはいうまでもないが、目覚めたあとの激変ぶりが、まして彼らを絶句させた。鬼の銀色と呼ばれた少女のとげとげしさ

はすっかり消え、今では、本当に人が変わったのでは、とまことしやかに言われる。なるほど、つましくリヒトに寄り添うさまは、はかなく、内気にも見えた。しかし、

「そういえばあんたたちは、職員室に呼ばれてるんじゃないの？」

はつきりとした物言いはそのままである。ミサビとテッセンは「ああ」と顔を見合わせた。

「そうだったな。面倒くせえなあ」

「じゃ、ちよつと行こうか。どうせ夜には会えるんだから、結果はそのとき。——二人とも、寮に戻るの？」

「うん。じゃあミュー、会議は夕方だろ？——どつか、二人で甘いものでも行こうか？」

「行く」

二人が仲良く去っていったのを見送りながら、テッセンはため息をついた。彼らの後姿は、ただの友人には見えない。当人たちがどう思っているのかはともかく、その甘やかな雰囲気は、恋人のものである。

「あいつがあんな軟派になるとは思わなかったなあ」

テッセンがぼやくと、

「まあねえ」

ミサビが苦笑する。彼もまた、茶色い髪をやや長めに伸ばして、後ろでひとつに結んでいる。彼が通り過ぎる女子に手をふる、歓声があがった。「お前もか」と呆れて、テッセンは大きく鼻から息をもらす。

「まあ——外部生なら、あのくらい普通だと思っけどね。君が固すぎるんじゃない。封建主義的っていうんだよ、そういうの」

「封建主義おいに結構。俺は、こうはなりたくねえな」

じろじろと、中性的なミサビの容姿をためすがめつして、テッセンは腕組みした。

ミューが同級生になってからというものの、いつのまにリヒトとそんな仲になったのか、女子のあいだでもちよつとした騒動が巻き起

こった。シンが現在留学中のため、代替としてリヒトの庇護を受けているのでは、という噂だったが、リヒトのどこにも、彼女をひきつけてしかるべき魅力がみあたらないので、みんな、困惑している。幼馴染であることを知るのには、ミサビ、テッセン、今はいないが、クラスメイトのシルル、三人だけである。

ミサビにしても、誰にでも愛想がいいものの、やはり、ときどきこそそこそどこかに出かけていく姿を、テッセンは見ている。女関係だろうと探りをいれても、リヒトのようにあっさり吐かないのが癪だった——しかし、今は、リヒトとミューである。

二人がどうなっているのか、テッセンにも図りがたい。このごろリヒトが何を考えているのか、テッセンにもわからなくなっている。「そついや、素面で愛してるっていえるやつだったか。うーん、平安も変わった。隔世の感があるな」

「古くさいなあ。じゃあ、君は、好きな人ができたらどうやって伝えるわけ。まさか——和歌でも詠むなんて、天地がひっくりかえったってないだろう」

「俺は決まってる。一言、月が綺麗ですね——男ならこれできまり」

「新月だったら？」

「星が綺麗ですね」

「曇りだったら？」

「街の——明かりが……」

「昭和区限定だね、それ」

「——やめよう」

「そうだね」

ため息をつく、二人は、再び、校舎の中へ戻った。彼らにとって、この一年の予定を決める大事な申し渡し、担任からあるはずだった。

「通っただろうか」

歩きながら、いくぶん心配そうなテッセンに、ミサビは一言「なぜ」と、不思議そうでもなく言う。

「君以外に誰が行く？」

「——あの一件がある。俺たちは、いわば、あいつの身代わりでもあるはずだ。それを——出すかな」

「憶測が乱れ飛ぶのは承知の上だろうね。それでも、国家百年の計を崩すわけにはいかない。どのみち、誰かは行かなくちゃ。かえって不自然だ」

「ああ」

「行こう」

職員室のドアノブに手をかけると、ミサビは一気に開いた。

*

一方、ミューとリヒトは、学園を出て、大正区にある喫茶店へ向かっていた。

歩いていると、じぶんの隣にいるミューに、通行人の視線が集中する。それが、面映く、奇妙に照れて、リヒトは知らずのうちに早足になっていた。

「待ってよ。早いよ」

「ごめん」

あわてて立ち止まり、ミューが追いつくのを待つ。小走りにやってくる彼女の、最近ばっさりと切って短くなつた前髪が、ふわりと風に舞って、かたちのいい額をあらわにする。どの一瞬を切り取っても絵になる少女である。元、男だとは思えない、と、そのたびにリヒトは思い、もう女の子なのだから、と思い直す。

店であんみつなどつつきながら、食欲全開のリヒトを前に、ミューは思案顔だった。

「ねえ、昨日」

「ん？」

「シンから……、手紙が、来たんだけど」

「ああ」

「あとね。今度、私の——検査があるの。マテ研に、一緒に行ってくれない？」

「いいよ」

あっさりと言う。同級生になって、ようやく一緒にいられるようになってから、いつもこうだ、とミューは思い、ふと、知らないあいだに増えた彼の癖に気付いてどきりとする。彼女が眠っているあいだ、リヒトはずいぶん成長していた。すっかり背も伸びたし、横幅も増えて、以前のように子どもっぽいところが少ない。再会したとき、ずいぶんな変わりように面喰らったことが、昨日のように思い出される。

彼ののんびりとした様子にも不安を隠せなかった——ほんとうにわかつているのだろうか？ 一年と少しのあいだ、何事も無かった。だからといって、これからも何も無いとは限らない。

彼はサンプルだ。天使たちの干渉を受ける身だ。

「夜はどうするの？」

「同窓会」

これも信じられないことに、リヒトは、見かけによらずずいぶんな甘党だった。器の底に残った黒蜜まで残さず飲み干す。ミューの残したものでさらって同様に飲み干し、ごちそうさま、と丁寧に手をあわせてお茶を飲んだ。

「シンさん、なんて？」

「え？」

「他には」

「他……ええと——」

いつか草間士郎に、簞のようだと言われた目が、ミューを見ていた。特有の、どこか遠くを見るような視線の向けかた。こんなとき、ミューは、リヒトのことがよくわからなくなる。

「向こうの情勢と——気をつける、って」

「気をつける？」

「おとなしくしてろって。——そればかり」

「そう」

彼は、珍しく声を低くうなずいて、それきり、ふと何かを考え込む。

——何か、変だ。

ミューは、最近、リヒトが妙によそよしく感じられてならない。忙しい高等部の授業が始まって、進路をはからずも変更させられたことを思い出して腐っているのかもしれないし、ミューと同じ学年になったのが嫌なのかもしれない。いや、こうやってまとわりつかれるのがいやなのかも——

ほつつておくと、どんどん思考がマイナスになる。それを、リヒトは敏感に感じ取ったのか、顔をあげると「ちよつと」と、するどく声をあげた。

「ギン、ストップ——今、なに考えてた」

「なに、つて……」

答えに詰まる。こういうとき、うまく言い逃れる術を、彼女は持たない。こういうことにならないように、今までは、人をよせつけずに生活していた。しかし、すでにこの幼馴染の前で、無防備でいることに慣れている。リヒトは、ミューの緊張を見抜いて、表情を和らげた。

「的外れもいいところだよ。違うよ——俺が考えてたのは、別のこと」

「別？」

「最近、思っんだよ。ようやく、今になって、冷めてきた、ということだろう。昨日、夢を見た。修学旅行の夢を。俺が変化した日の夢」

「ああ……」

彼が、京都で修学旅行中に粒子を浴びたという話なら、すでにミューも聞いている。「どういうこと」と尋ねると、リヒトは「本当に俺であるべきだったのか、と——」

と、あごに手を当てる。これも、最近になって出てきた癖である。

そうすると、どことなく、老人めいた雰囲気は彼は帯びた。

その夜。

彼がようやく暖簾をくぐったときには、座はすっかりできあがっていた。

「遅れました、先生。このたびは、ご結婚おめでとうございます」
座敷に上がると、リヒトはまず上座へむかい、この宴の主役である恩師に、膝をついて頭を下げる。ざわめきのなかで「よしてくれよ」と相手は言った。

「いまさら先生でもないよ——それにしても久しぶりだ」

笑ったのは、キョウタローである。一年半前、平安学園の社会科教師の職を辞してから、今は、町で剣道場と塾の師範をして暮らしている。彼が結婚するにあたって、同窓会を企画したのはミサビだ。彼も今、ここへ向かっているはずである。

先に来ていた面々は、すっかり楽しくなっているようだ。さすがに素肌を出すことはしないが、だらしなく、着物やシャツの襟をくつろげて、酔ったようになって騒いでいる。

「リヒト、何飲む？」

席についたところで品書きをおしてよこしたのは、ワンピース姿のマチコである。少しでも華やかにしようというのだろう、髪に、綺麗なデイジーの飾りをつけている。女子は打ち合わせたのか、皆、髪や胸に生花をさしていた。

「会津中将」

そう決めて彼が店主を呼ぶと、

「俺もお——親父い！ 赤霧島！」

「越乃寒梅。いや、冬玲を」

「京山水」

「オ리콘ビール」

それぞれのお里がばれそうな酒の名を、めいめいが注文する。

彼らの体は、アルコールを分解しない。分解しないかわりに、吸収もしないので、飲酒の行為は単純に味をみるだけだが、酒の持つ力は、座そのものを酔わせる、という効果を、ここではもたらした。アルコールの影響を受けないので、未成年でも、高等部から飲酒が許可されている。この春待ちわびた特権を得たばかりの彼らは、なにかという酒を飲む機会を探していた。今日と決めて解禁を待っていたものもいて、苦い、だの変な味、だの、初心者まるだしの感想を漏らしつつ、それでも楽しげに杯を重ねている。

しかし、酒が飲める、ということは、慶事でもある——そう、文字通り今回は慶事だった。キョウタローの結婚。ようやく彼に訪れた春を祝う場である。

しかし、そこでただひとり、テッセンだけが浮かない顔だった。

「どうしたの。あれは、合格だったんだろ。——また、タエコさんに怒られる?」

「ん? いや……ああ、まあな」

長年、藤原家に仕えてきた家政婦の女ボスであるタエコは、もろの集まりでテッセンが居酒屋へ行くことを快く思っていなかった。いわく、居酒屋などは下男が行くところだから、であるらしい。藤原家の御曹司が行っていい場所ではない、という。

しかし、テッセンの悩みは、べつにある。酒が来て、一献傾けたあと、リヒトは口を開いた。

「あらためまして。こんな場で……ご愁傷様——というのも他人行儀だけど。俺も、本当にテッセンの母上が好きだった。残念だ」

「いや。——ありがとう」

「どういたしまして」

テッセンの母、藤原緑が亡くなったのは、彼らが高等部に入学し、すぐ、卯月初旬、桜舞い散る春の日のことだった。つい一ヶ月ほど前になる。葬儀はしめやかに行われた。テッセンを宿したために生きながらえていた女の最期が穏やかだったことが、一家のただひ

とつの救いだった。すでに、リヒトは、藤原家の内部の様子も知っている。最期の日まで、“火宅”にテッセンの友人として出入りしてきたし、彼から、家庭内の事情も聞いていた。テッセン自身は、葬儀後すぐに突入した実践授業のおかげで、母を失ったショックから遠ざかっていたが、最近、ようやく、心がそちらに向いていたところだった。

「それで。母上が亡くなってから、あの家をどうするつもり。タエコさんは」

「本宅には、いまさら、俺は戻る気はないんだ。また、国に帰るなんて、タエコもいまさら思っちゃいないだろう。俺も、はいさようなら、と家から追い出すほど冷淡にもなれん。俺が生まれてから——いや、生まれる前からか。タエコはずっと母に仕えてきた。ぼんくらの末息子の面倒まで引き受けて、今じゃそれが、あいつの生きがいみたいなものだ。今までどおり、二人であの家で暮らすさ」

「家族は、それで？」

「まあ、反対されてるな。親父が特に——」
「そう」

リヒトはため息をつく。テッセンは、うんざりと、落ちてきた髪を後ろにかきおくる。

「俺の留学に関するあれやこれやが出てきてから、姉や兄まで巻き込んで、ちょっとした騒動だ。どのみち、今日はまた、本宅に帰らねえと」

彼の留学先は、米国にある蓬萊ゲッターである。彼はそこに、武術の研鑽を積みに留学する——というのが、昼間、彼とミサビが職員室に呼ばれていた理由だった。リヒトがせがむと、テッセンは、「選考結果通知書」という、簡素な書類を見せてくれた。

「ミサビは？ あいつもそれで遅れてるんだろうけどな」

「あ、うん。一度寮で会ったけど、用事みたいだ」

ミサビもまた、秋から他ゲッターへ留学することが、さきほど決まった。フランスにあるイース・ゲッターで、彼は語学留学である。

あいついで決まった親友二人の留学が、しかし、リヒトは心配だった。

あの事故から二年が経とうとしている。

まずまず、何事も無く過ぎた。あれ以来、妙なことも起こっていない。天使からの干渉もない。嘘のように平和だ。ときおり、彼は、自分がサンプルであるということを忘れそうになる。

逆に平和でないのは、外の世界だ。

「気をつけてね。最近物騒だって——もっぱらの噂だ」

「わかってるよ」

平和を絵に描いたような彼らの生活と異なつて、いまや、世の情勢は多難のように見えた。アフリカのゲットーでは、地域住民との間に、ついに武力衝突が起きた。きっかけは些細だ。子どもが変化したためにゲットーに連れて行かれた、という親が、他の同様の親と武器を手に、政府に乗り込んでいき、子どもを返せと直談判をした。変化したとはいえ、わが子は手元で育てたい、その権利があるはずだ、というのだ。口論のすえ、その担当部署にいたゲットーの高官五人が殺され、容疑者の身柄を引き渡す、渡さない、で、ゲットーと現世の政府のあいだで熾烈なやりとりがされた。その後、母親に同情し、政府の対応に激昂した住民が、ゲットーを包囲した。自国の軍隊までが出動して騒動を押さえ込もうとしたが、不満を爆発させた国民を前になすすべもない。最終的に、彼らに対抗すべく出動したのは、アフリカ・ゲットー軍である。そして、ついに戦端が開かれ、あつという間に戦闘は終了した。

あらかたの予想通り、敗れたのは、包囲したほうだった。死傷者は幸いにも出なかった。しかし、それこそがもつともまずいことであつた。時間を操るゲットーの住民に、物理的攻撃が効かないことがあらためてわかり、それは、全世界の人間を絶望させ、震え上がらせた。

結局、ゲットー側が寛大にならざるを得なかった。もとより、高官五人の賠償金は法律により放棄せざるを得ない。痛みわけ、とい

うように現世では見た。しかし、どうみても、ゲッター側に不満が残る決着である。何もしていないのに五人が殺され、包囲され、正当防衛で対抗すれば恨み言を言われ、賠償金まで放棄させられたのである。かくして、ゲッター内に、人間たちへの嫌悪感が広がるのであった。

「やめてほしいな。今まで平和でいたものを。いまさら戦って何になる？　そう思わねえか？」

「平和では、世界は一步も進まない、ってギンが言っていたけど」

「そうだ。しかし、なんか、きな臭い雰囲気なんだよな、最近。それがらみ、ってわけじゃないだろうが——上のほうがばたばたしてるの、知ってるか？」

「それもギンが言ってた。近々、人間側が何かしそうだって」

「ああ。そういえば……お前さ、今、ミューとは——」

「すみません、遅れまして」

歓声があがって、そちらを見ると、ミサビが到着したところだった。彼は、型どおり、元担任に祝辞と挨拶をのべると、二人のもとにやってくる。

「シルルを連れてこようとしてたんだけど、駄目だった。——また、頭痛がするって」

困ったように、肩をすくめた。

「そう。大丈夫かな」

同じく、サンプルの秘密の共有者であるシルルは、あれから、頻繁に体調を崩すようになった。以前は明るかった性格も、今ではどこか歪んで、そのギャップに自分でも恐怖を感じているようだ。シルルだけが、あの東京で別のチームにいた。彼らには分からない苦しみが刻まれているのかもしれない。

「お前は、秋からだっけ」

ミサビにむかって、テッセンが、留学の開始時期について尋ねる。「そう。テッセンは来月すぐ？」

「ああ。でも、夏に一度帰って来るよ。で、次がどこかは、まだ未

定。お前らは？」

「変わらず。でも、夏は、僕らは、仕事かな。去年と一緒に。別荘のついでに、遊びにきてよ——でも、今年は、向こうでの小遣いくらい稼がないと。遊んでる暇ないかも」

「私も留学だよ！」

横から声をかけてきたのは、マチコだった。いつの間にジャズミンティーをやめたのか、ワインを手に、頬を赤くして、声がいつもより大きい。

「ロンドン！ ロンドン橋渡るんだよ！ 短期なのが惜しいよ！」

「被服だつけ。ますます腕があがるんじゃない——あ、カレン。マチコを引き取ってくれる」

「お騒がせいたしましたわ」

キョウタローのせつかくの祝いの席だから、ということと呼ばれていた、現在高等部三年生のカレンは、今年、とうとう、籍を平安市に定め、これからはずっと平安市民である。「今度は私がマチコを待つからね」と喋る——彼女は、印僑であった父親と、アメリカと日本の混血の母を持つため、インドにあるゲットーと平安ゲットーの、現世なら二重国籍であった。すでに、舞踊家として、平安市以外でも名高い。彼女とマチコが、女子たちの群れに消えたあと、テッセンが、

「夏ね」

と、彼には珍しい、アンニュイな声色で言った。

「なに——どうしたの」

「何か不安でも？ いまさら？」

「いや、ちよつとな。ちよつと、相談したいことがあったんだが」

「なに？」

「来たんだよな。あれが——」

「あれってなに」

やけに口ごもり、言い洩るテッセンに、いらいらとミサビが言った。テッセンは「ここに来る前、決まったって報告しに——実は一

度本宅に行つたんだが。とうとう、来た。母が亡くなつたからだろ
うな。早いところ、俺を縛り付けておきたいんだろ——縁談が

「縁——」

さすがにミサビも絶句した。リヒトも言葉を失つたが、いち早く
回復して「結婚するのかテッセン!?」と、枳になみなみと注がれ
ていた酒をこぼした。

「しいつ」

あわてて、テッセンが彼を押さえつける。幸い、他に気付いてい
るものはいない。

「あ、相手は……?」

気の毒な女子もいたもんだ、と、友人に対してまことに失礼なこ
とを思いながらおそろるおそろる尋ねると、テッセンはますます表情を
厳しくして、ぼそりと言つた。

「何、きこえない。誰?」

「——ヨラ」

「ああ、」

なんとか聞き取つたミサビが声をあげた。しかし、すぐに、その
声は、どこか、不安を帯びたものになった。

「それは……、懐かしいね」

不思議な調子でうなずき、困つたようにひつそりと笑つ。からか
いの言葉は出ず、二人とも、顔を見合せて黙つた。首をひねるリ
ヒトだったが、次の瞬間、彼もため息をついた。

「サヨラさん、というひとはね。君は知らないだろうけど有名だよ。
通称、虫愛する姫君、という——」

「ミサオの妹だよ」

「ミサ——オ、の、」

一時期、リヒトと寄宿舎の同室だつた少年。妹がいたのか、とり
ヒトは驚いた。もちろん、ここは平安市なので、血のつながりの無
い義理の妹なのであろうが、まさか、そんなひととの縁談がテッセ
ンにくるとは。

本人も「晴天の霹靂もいいところだよな」と呟きながら、手にした杯を干す。どうやら、気の毒なのはテッセンのほうらしい、と悟って、リヒトはまばたきをくりかえす。いつもの不遜さは影をひそめ、信じられないくらい苦りきった顔である。

彼は言った。

「たしか、何度か会ったことがあるはずなんだよ。親父の会社からみのパーティーやらで。でも、俺が本宅を出てからは、そういう集まりにも無縁だったし……もう、顔も忘れちまってたな。それが、円城寺家から、俺が今どうなってるかっていう探りがあったんだと、去年の春ごろ。で、親父同士が乗り気になっただらしくてな。今度、俺が留学するっていうのを、あちらさん、いち早くどこからか聞き込んできたんだろう。そりゃ、将来有望なんだ、と、どうも勘違いして、で、数ある候補者の中から俺に絞ったってわけだ。娘とどうか、ってな。その話が、ついさっきだよ。そりゃ、こんな顔にもなるわ」

テッセンは、うんざりと頭に手をやった。

「ミサオと同級生だった、ってのも、妙に向こうの両親の気になってたみたいだな。あの日なくした息子のかわりに、なんて思ってたら、面倒だぜ。そう思うと、今から気が重い」

「お察しするよ。また、それは——光荣な、とっていいのかどうかねえ」

「光荣なもんか。あのこまっしゃくれたマセガキだぞ。どこをどうとつたらそんなセリフが出るんだよ」

「光荣って？」

リヒトが尋ねると、

「ミサオの妹っていうとね——リヒト、彼女に会ったことないでしょう。不思議だと思わない？」

「というより、今いくつなの。中等部にはいなかったよな、そんな子」

「そう、いないの。というのも、彼女、すごくてね。ある意味、シ

ンよりすごいかな。粒子操作力に関してはからつきしなただけど、学業全般においては、六歳で初等部の全課程を修了、八歳で中等部卒業資格、十になるとときには、もうすでに高等部も出てた。それで、たしか今は、十三になるはずだよ。十六のテッセンと——と、先方が考えても、まあ、おかしくない」

「簡単に言っつなよ」

テッセンは、口をへの字にした。ここまで弱っているテッセンは珍しい。

「ふうん。すごい秀才なんだなあ」

「いわゆる、そう。才媛ってやつだよ。で、今は——」

「虫愛ずる姫君」

ぼそりとテッセンが言う。

「虫めずる、……虫が好きなの」

「ちよつと変わってるんだよねえ、彼女」

ミサビが首をひねった。

「今だから言えるけど、それで、ミサオが寄宿舎に入っていた、というのもあるかもね——ああ、カレン、ありがとう」

ロゼワインのグラスを受け取って、ミサビが笑う。彼の笑顔にまったく無反応なのはカレンくらいで、悪魔的でさえある妖艶な笑みを浮かべて「どういたしまして」と下がった。

「それで、だ。親父がな。留学する前に、本人と一度会って来いっていうんだよ。先方も、本式に決めたわけでもないし、うちだってこの先どうなるかは、まだ決めかねてる、というんだ。だからとにかく一度会ってみろ、と。俺だって、ふざけるな、くらいは言ったわけよ。でも、そしたらあの野郎。会ったうえで、双方が、あまりにも気にそまないようなら、白紙に戻してもいい、という——そのくらいの柔軟さはあるわけだ、一応。ふん、だったらいいそうですね、かって、素直に会うと思ったら大間違いだよ。そしたらさ」

テッセンは、懐から紙切れをだして、二人の前のテーブルに置いた。何か、字が書かれている。

「兄の最期についてお聞きしたいことがあります、だと。会いにいらっしゃい、だそうだ。その、サヨラ嬢本人から——ここに来る途中、アルリシャがとつかまえた虫が持っていた、その文を。向こうは、どうやらまんざらでもないのかもしれない」

「電光石火だねえ。ふうん。で？」

「行ってくるよ——一応な。兄の死に様をだしに、人のツラを拝もうなんて根性の女は、死んでもごめんだが」

ミサビとリヒトは顔を見合わせる。テッセンは、心の底から腹をたてているようだった。どん、と杯をテーブルに置いて、険しい顔で、騒ぐ同級生たちをじろりと見た。

いちだんと騒がしくなった座敷。

キョウタローの新妻であるルリが登場したためであった。拍手のなかで嬉しそうなキョウタローを見つつ、「おめでたいこった」とテッセンは肩をすくめた。彼にとっては、慶事もあてつけのように、今日は思えたようだった。

とにかく、これがこの年の春だったのである。

六月、ミサビとリヒト、ミューは、壮行会を開いてテッセンを送り出した。「手紙をくれよ」と言えば、「さつさと相棒を見つけりやよかつたんだ」と、別れを惜しむというより形式美として「姐さまあ」「ああ、ひゅうがちゃん」「お姉ちゃま、お元気でね」と言い合う彼らの使い魔を横目に毒づかれる。彼らがいれば、かくりよを介して、ただちにメッセージをやりとりできる。たしかに、思ったが、リヒトは苦笑いを浮かべるばかりだった。

使い魔について、彼は思うところがあった。ミサビから「楽しいよ」、ミューから「寮の閉門後にだって、これでおしゃべりできるのに」といわれても、いまだ、探す気になれないのも、つきつめればそのせいである。

かつて退院したばかりの頃のこと——サツキの相棒であった政宗に、新しい主に、と懇願されたこと——その、黒狐の憔悴した様子が、彼の記憶に強烈だった。どうして自分に、とおそろおそろ尋ねると「せめて、あるじの友人だったひとと縁を結ぼうと思つてな」と政宗は告げた。魂と魂で契約を結んだ主従が、突然に引き裂かれる悲しみが、その声にはあふれていた。

「なア、ご友人殿。お受けしてはいただけまいか？」

だけど、とりヒトは答えた。自分は決して故人の代わりにはなれない。「お互い、あとで苦しいだけだよ」——やんわりとお断りすると、彼は一声さびしげに啼いて、鎮守の森へと去っていく——その後姿に、そうか、俺が死んだら、そいつはどうするんだらう、と感じた。

これ以上、他の誰かの人生を狂わせられない。

「いいよ——今のところ、いなくても不自由は感じていないから。しばらく独り身でいる」

テッセンは、ちえ、と言って、頭をかいた。

「しょうがねえなあ。月に一回くらいなら、書く気にもなれるかもな。報告書のコピーでよければ送るけど」

「それはいい」

それが、最後の言葉になった。総府の人間に連れられて、彼は、マチコたち他の留学生とともに去っていった。夏まで、しばしのお別れである。

リヒトは、彼を四月から悩ませていた胸の内を、ミューにだけ打ち明けて、あとの二人には黙り込んでいた。テッセンもミサビも、ときどき妙に静かになるリヒトを不思議に思っていたが、友人の留学を前にさびしくなっているのだろうと思って、特に気にしなかった。

男の友人だから打ち明けられないことだってある。

その日、風呂からあがって、部屋に戻った彼は、男子寄宿舎の高等部伊棟——中等部のときにいた羽棟より、二畳ぶん広くなった部屋で、鏡に自分の姿を映して、見入っていた。

この目。この体。

今なら、はつきり言える。

世界に一つだけ——ではない。

彼が変化したのは、おそらく、そう、あのときだ。

脳裏に、ある場面がよみがえる。

三年前、京都、夏。

金魚のように赤い帯の端をゆらめかせて、小路を走っていた少女。同じようにたむろする学校の生徒たちのなかで、なぜ、彼らにだけ、それが起こったのか。そのむこうにいたグループだって、同じように、班のみんなであつまっていた。

そして、その、生徒たちのなかに、自分はたしかに——

そして、

「——あのニュース」

鏡の中の顔が陰しくなる。

じぶんの魂が、がイチカのハクに定着したというのなら、あるいは？

ふと、ドアが開いて、同室のグエンが入ってきた。帽子を壁のフックにひっかけると、無表情にリヒトを見る。「ただいま」と挨拶をして、屏風で区切られたスペースへ入っていく。

グエンは静かだ——ほとんど、自分のことについては話そうとしない。彼もまた、リヒトがサンプルであることを知っているはずだが、今まで一度も口にしない。

鏡に見入っていたことを見られた気まずさがあつたが、思い切つて話しかけると、

「グエン、さあ」

答はしばらくしてから返ってきた。

「なに」

衣擦れの音。彼は、授業終了のあと、どこぞへ出かけているようで、毎日帰りが遅い。やがて、浴衣になって姿を現した。

「なにか用か」

「いや。変化したとき、どうだったか、と思って。いやじゃなければ知りたい」

「俺の家は貧乏だった」

唐突に彼は言った。

「養子に出されたが、そこが寺の住職のところだった。その親父殿が、ゲットーに招待されたので、手伝いで、ここの東北の——修行場に行った。それで」

「感染した？」

「そうだ」

うなずいて、グエンはそのまま、クローゼットから写真を出した。促されて見てみると、そこには、小さい頃のグエンが、今の彼のミニチュア版といった坊主頭で写っていた。場所は、どこかの寺院のようだ。平安市にはさまざまな宗派の寺社があるが「曹洞宗」とグエンはつけたした。

「初日だった、と記憶している。これを撮った夜に、担ぎ込まれた、マテ研に」

「あ——そう」

「不思議なもんだな」

「不思議って」

「ここで暮らしてる普通の人間は多い。技術を伝えに来るもの、医療関係、政府関係。そのなかで、制御装置をつけてれば平気だ、と長年無事に暮らしてるやつもいれば、ここに来た途端に、羽化転生の憂き目を見るものもいる。その差が、不思議」

「そうだね……」

藤原家のタエコなど、その筆頭だろう。彼女はそもそも看護士で、平安大学付属の看護学校に講師として招かれ、病院で指導を行ううちに、藤原緑と知り合って、家政婦として藤原家に雇われた。それで、今もピンピンしている。

大工など、職人たちを筆頭に、無事なものはたしかに多い。

「似たようなこと、ミサビも言ってたな……」

「それで」

「ん？」

「お前が鏡を見てた理由は」

「ああ——」

□ごもっていると、グエンは「そういえば、お前あての手紙が来た」と、写真をしまいながら言った。

「手紙？」

「総府だな、あの形は」

「ああ。ありがとう。行ってみる」

理由を話さずにすんでほつとした。グエンは追求しなかった。二語文以上話したのは初めてだな、と思いながら、彼が事務室前の在籍板の前に来ると、たしかに、手紙が届いていた。名札の下にあるメールボックスからはみ出した封書を取りだし、その場で開く。書かれていたのは、なんとというタイムリーな、という通知だった。

インヴェーション、と呼ばれるものである。平安市の住民に与えられた、家族との再会のチャンスだった。毎年、抽選で選ばれたものが、平安市へ家族を招待できる。学生への割り当ては七月から八月の夏季休暇で、そのあいだは、武道も補習授業も免除される。

□

親族招待許可について

抽選の結果、貴殿の親族を、今夏、平安市に招待することを許可します。

希望者は以下の欄に、四親等以内の招待したい親族の氏名を記し、誓約書に署名捺印のうえ、同封の返信用封筒で返送願います。
総府より先方に確認のうえ、おって滞在施設、日時などお知らせいたします。

□

夕食の席で、それを聞いたミサビは「良かったね」と言ってくれた。話題はそこから、異国の地にいるテッセンやマチコの話になる。食事が終わると「足りないでしょ」とミサビは笑い、リヒトはうなずいた。

「何か、ある？」

「厨房から、野菜屑をもらってね。いいスープができてる。リゾットは？」

「いいねえ」

育ち盛りの食欲が、食物を要求してやまない。夕食のあと、デザ

ートがわりにミサビの手料理のご相伴に預かるのが、ここ半年の習慣だ。共同スペースにある丸テーブルで、チーズを散らした刻み野菜のリゾットを食べていると、下級生や同級生が次々とやってきてうらやましそうな表情で通り過ぎていく。料理人志望だったミサビの腕は、寮の生徒じゅうに知られているのだ。「今日は二人分しかないから」と、のぞきにくる生徒たちに断りながら、ミサビは、自分のぶんには手をつけず、リヒトの食べっぷりをじっと見ていた。

「それだけ食べてもらえたら、野菜屑も本望だろうねえ」

彼は笑った。

「で、味は？」

「俺は、もつと塩がきいていてもいいな」

「ふむ。なるほど」

メモをとりながら、ミサビは何を思いついたのか、薄い唇を、ふ、と綺麗な半月にする。がつがつとつめこんだあと、リヒトは顔をあげ、

「ミサビは食べないの」

「ああ、これは、僕のじゃないから。——それより、気になることがあってね」

「ん？」

「何か、考え事してるでしょ」

「どうして」

「君はすぐに顔に出るから」

「ええ？ そ、そうかな……」

「ミューとばかり喋ってるから、それも妙だって、最近気になった。テッセンにも、君については、気をつけるように言われてるし」

「なにそれ。まだ保護者きどり？」

「自分が居ない間に何かあったら、と思ってるんだよ」

「そう……」

潮時かもしれない。

よりによって、インヴェーションまで来てしまったのだ。それ

に、彼らは夏の間、別荘地でのアルバイトを予定している。家族の逗留場所は、別荘地近くのホテルに決まっていたから、どちらにしろ、ミサビには知られる運命だったのだろう。

食後のお茶を飲みながら、

「もし、俺と同じ魂をもつものがいたら、そいつも、このハクに馴染んだらうか。ねえ、ミサビ。ミサビはどう思う」

「——ん？」

ミサビは怪訝そうな顔をした。

「インヴィテーション。すごく嬉しいけど、迷ってる」

「どうして。ご両親に、会いたくない？」

「会いたいさ、すごく。会いたい——弟にも。でも、俺ね。双子だったんだ」

「双子？——双子、……ってことは、」

「そう。テッセンには、言えなかったけど——もしかしたらね」

リヒトは、満腹の腹をさすりながら、天井に吊るされたランプの炎を見上げる。

「ここにいるのは、本当は、俺の弟だったかもしれない」

これが、今年の彼の夏の引き金になるとは、彼らは露ほども知らなかった。

平安市から時差九時間の場所では、暗い空に、毒々しい色をした雲が広がっていた。もともと、天候の変わりやすい地域として有名である。ねっとりとした夜気につつまれた町の様子は、この時期には珍しくないが、くわえて春の嵐が都市を襲ったため、往来にはすでに人の姿が無い。瓦斯灯から火が消える瞬間を目にして、

「マラルメが描いた夜だな」

ふと、昔読んだ詩の一節を思い出し、その男は、窓の外を見て呟いた。もうひとり「あの雲がもしもその詩の一遍なら」と応じた。「友よ、ここに在るわれわれは何になる？」

「決まってる。偽りの薔薇色の理想だよ」

「そう、だろうか。——残念ながら、薔薇ならば、しかもそれが偽りとなれば、何色もの同類を生むものだ。われわれが一つではないように、理想もまた一つではないのだ」

窓の外は雷鳴だった。風は、狼の吐息となつて煉瓦の壁を揺さぶっている。うずまく風の模様を木々のざわめく形によって想像しながら、ロンディニウム・ゲットー——イギリスはロンドンにある大西洋連合第二のゲットー——の市長、リチャード・ブラックは「たしかに」と重々しく言った。相手は、イース・ゲットーの魔的研究所イース支部所長、ジャン・ラロンドである。二人は友人同士であったが、多くの権力者の使う“友人”がそうであるように、それは彼らにとって、子どものように純粋な意味ではない。

「その話は本当か？」

まわり道を経て、ようやく本題へ入り込む。

「らしいよ。最近、うちに来たものの話によるとね」

「この間の発表では、まだまだ——だったのにか」

「ダミーだった、と見るべきだろうな」

彼らの口調は、ともすると、独白のようにも受け取れる。向かい合っていないながら、けして視線を合わせようとしな——というのも、ラロンドのほうは、政治家を馬鹿にしきっているし、ブラツクのほうは、研究者など国の飾りだと思っている。勲章が多いほど自国のレベルの高さを誇示するのに役立つ、というわけだ。しかしとにかく、イース・ゲットーとロンディニウム・ゲットーは、同じアトランティック・ユニオンに共存する、いわば兄弟なのだし、マテ研支部同士も、現在はほとんど、二つで一つとっていいほど技術と施設が提携している。

「蓬萊か。まさか、あそこが一步ぬきんでは思いもしなかったね。生物学の分野においてはロンディニウムの右に出るものはいないし、物理学においては、イースの研究者たちが最高だと思っていた」

「最近、どこも馬鹿にできないよ。われわれの独壇場は終わった。第一——魂魄、幽界といったものを説明するのには、東洋思想のほうがすぐれていたからね。生物地球学、というものを打ち出したのは、人種でフルコースができるほどの、自称、自由の国——だったし」

「呪術、錬金術、医術、音楽。そして虚構。それらが、歴史上ついにひとつになるときは近い、とな」

「この、スチュアート・チャンという奴は、間違はなく、現世で子供のころ、夢想家だったに違いないよ。ゲーム好きのオタクだった。賭けてもいい」

「君も人の事は言えないだろう」

「お互いさまだ」

陰險な笑みが唇から漏れていたが、これも、お互い、自分だけは高尚な笑みを浮かべていると思ひ込んでいる。

それはそうとして、問題は、スチュアート・チャン——蓬萊の一

人の科学者だった。引き抜くにも蓬萊市が離さず、止めても無駄なタイプだ、というのは、彼らが手にした報告書からも知れる。

「やっかいだねえ」

「ああ……」

「彼をどうにかすれば、チームは解散するかね？」

「ヒルガーが彼ごと売ってくれなかったのは痛い。何しろ、特許の問題がある。実現には、絶対に彼をこちらに引き入れることが必要だった。だからといって、もう、消すことも無理だ。ここまで抜きん出てしまっている——天才、というものはね。望むと望まざるに関わらず、彼もそれこそ、サンプルに匹敵するよ。あの、フェアシユミット——最初に粒子を発見したものや——ヴェネストロム、若さと生をすべてマテキに捧げて死んだものたちと同じ。まったく……」

「先に出せる見込みはない、というわけか？」

「ゼロとはいわないよ。アプローチの仕方は、いくつもある。もっとも有力なものが欠けているというだけで」

「そうか。しかし、それで地位を確立しても、やはりどうしても、頭を下げて売ってもらわなければならないわけだ。それには違いないだろう？」

「そう……、ふっかけられるに違いないな」

「だが、入り込める余地はある」

市長は、閃光と雷鳴のあいだに、その暗い緑色の瞳に希望の光を宿して、ラロンドを見た。ラロンドは、内心の疑問を隠して、無表情に首をかしげた。市長は低く笑い、手にした資料を机に投げ置いた。

「よくよく調べたところ、彼は、最後の実験に必要な人材を探している。それが、こちらの人間なら、たとえばどうかね」

「こちらの人間？」

「うまくいけば、裁判に持ち込める」

「裁判」

ラロンドは驚嘆した。自分には考えもつかなかった案である。法廷での決着など、この件に関しては念頭に置かなかった。彼もまた、最先端の技術は綺麗なままで世界に公開したい、と思っている人物だ。何にもまして、彼の気持ちをこの方法に向けさせなかった理由は、彼にも残っている科学者の誇りだ。これだけは、ただひとつの傷も許せない。きれいなままで世に出したい。これは、そういう種類の夢だった。あっさりと打ち壊してくれた市長に鼻白んでいると市長は、おかまいなしに「どうかね」と、高圧的な態度で迫る。

「よく考えたまえ。これしかないのではないかね」

「そう、ですねえ——」

たしかに、もつとも有効そうな手ではある。灰色の決着、といわれても、後世に名が残せるのならないか、と思われた。

「では、人選をしませんと」

「それはもうすんでいる。すでに、現地に向かわせた」

「何ですって。誰ですか」

「ミシエル・マクミラン——ハイラム・モリズロウ、それから、エレナ・ウェールズ。年齢は、十八、十七、十五。あちらが留学生をご所望らしいのでね。うちのとおっておきを行かせた。ミシエルは、君のところとの二重国籍だから、その子を選ばれば僥倖。イース市長にも話は通してあるからね」

「そうですか。では……」

「われわれの、最初の魔法使いに乾杯といこう」

市長は、机の上のベルを鳴らす。すぐに、使用人が、バケツに冷えたシャンパンを運んでくる。黄金にプラチナの泡を散らす液体がグラスに注がれる。ふせぎようのない心中の不協和音を響かせたまま、二人は静かに乾杯した。

「ところで、アフリカはどうなっているかね。あそこはまた、思いきった行爲に出た。君の意見を聞きたいね」

「アピールでしょうね」

ラロンドはゆっくりと言った。

「われわれは歓迎しましたよ。五人は尊い犠牲だが、あれで、間違いないく、ゲットーというものが、ちゃんと近所に存在する、と世界にアピールできましたから。まあ——クサマは大喜びしたでしょうな」

「ああ、それはそうだな。まあ、うちも移行は済んだからね——対岸の出来事だと笑っていられるのが嬉しいね。平安は思い切ったことをやると思ったがね。まあ、国土の問題もあるからねえ——それを思うと、平安ほど、魔法を切望しているゲットーはないだろうねえ」

「日本、か。相変わらずあの国もよくわかりませんからねえ」

「まあいいさ。それより、もしも魔法というものが現実になった場合、法整備をどうするか、というところがまた、厄介だね」

「で、それが済んだら、いよいよ戦争ですか。しかし、例のは……」
「たいしたことはないに決まっている」

「そうですかねえ」

「そうだ。君は心配性すぎるよ」

「はあ、そういわれると、言葉もないですな」

くく、と二人は笑った。

両方とも、まったく愛着を覚えない顔を見合わせていたので、雷光に混じって、別の光が窓を横切ったのに、気付かなかった。

2 留学生

一方、蓬萊市。

とはいえ、簡単にはいかないものである——と、スチュアート・チャンは、自分の思考に字幕をつけながら、構内を歩いていた。彼は、週に数回、大学の講義を聴きに行くことを息抜きとしていて、それを理由に、大学と隣接する蓬萊ジュニアハイスクール、ハイスクールのなかも自由にうろつく権利を得ていたが、彼の欲しい人材はというと、なかなか簡単には見つからないのだった。

学生たちが走り回っている。懐かしい光景に目を細めながら、彼は、手にしたジュースの紙コップに口をつける。

「他校の校章、他校の校章、他校の校章——」

留学生はさまざまいたが、いまだに、意中の人物とはぶつからず。しかも、その人物と出会ったとしても、厳しい条件をクリアしてくれるかどうかはわからない。

彼が掲げる条件は五つある。ひとつ、留学生であること。ふたつ、金で言うことを聞くこと。みつ、出身ゲッターのナシヨナリズムに染まりきっていないこと。よっつ、強い、ということに重きを置いて疑問を持たないこと。いつつ、口がとんでもなく固いこと。

とりわけ、最後の条件は重要である。友人などに不用意にもらされては困るし、国元への報告書に書かれても困る。見る目が厳しくなるのは当然だった。

四月、五月、六月と日が経つにつれて、もうそろそろ決めなくては、という時期にきていた。小麗が、これがどうかと持ちかけてきた留学生が数人いる。とりあえずキープしておいて、彼はしかし、自分でも協力者を見つけるのだ、と意気込んでいた。なにしろ、自分の人生がかかっているのである。彼自身も忙しいが、ここで手を

抜いては絶対にいけない気がする。しかし、

——今日も駄目か。

散歩のタイムリミットが迫っていた。

『燃えよドラゴン』のテーマを口笛で吹きつつ、何気なく彼が、駐輪場へ向かうコーナーを回ったところだった。

ふと、彼の視界に、道着姿の一団が映る。オレンジをベースにした生地に、蓬萊、と白い縫い取りがされたユニフォーム。そのなかにひとつだけ、『平安祖界』の四文字を背中にしよった、白い道着姿がいた。平安ねえ、友好都市ではあるけどねえ、とそちらを見たスチュアートは、おやと思った。

——なかなか、頑丈そうな体をしている。

高等部の一年生、というのだけは分かった。口が堅そうだ、というのが、遠目に見たその少年——というには、ごつごつしすぎているし、老け顔だが——の次の印象である。彼はその一団をやり過ぎしたあと、あとからやってきた同じ道着姿の一人をつかまえる。

「ちょっと」

自分がマテ研の人間であることをアピールしつつ「君たちのところに、ハイスクール一年生の、平安市からの留学生っている」

「ああ」と相手はうなずいた。

「テッセンのことでしょうか」

「テッセン？」

「平安市からの留学生ですよ。今月初めから、武術を学びに来てるんです。テコンドーは一週間で初段までいったみたいですが、うちじゃあそうはいきませんから、もんでやるつもりです」

に、っと笑って、少年は胸を張った。少林寺、とそこには書かれている。

「あ、そう。ありがとう」

「どういたしまして」

一礼すると、少年は、あっというまに走り去って行ってしまった。テッセン、テッセン、とその不思議な響きを口の中で繰り返しながら

ら、スチュアートは大学の事務室に引き返した。

「小麗！ シャーオーリーー！」

「わっ、びっくりした。なあに、老師。まだ何か？」

小麗は、事務机の前でひっくりかえりそうになりながら、スチュアートに顔をむけた。事務室と廊下を隔てる窓ガラスを、スチュアートが叩くと、おっくうそうに立ち上がり、埃を払うしぐさで、両手を体の前で叩きながらやってくる。お菓子をつまみぐいしているところだったな、と彼は思ったが、小言はさておき、目当ての人物についてである。事務室の隅にある応接スペースに入り込むと、ソファに座る間も惜しく、スチュアートは、先ほど見かけた留学生について話した。

「テッセン？ テッセンテッセン、丁——ちよつと待ってね」

吐き出されたデータを持って小麗がやってくると、スチュアートはその紙をむしりとるようにして、一秒で目を通す。

「平安市は、はたちまで姓を非公開にしているところがやかいだな。しかし、いいところのおぼっちゃんには見えなかった。おそろく孤児だろう。成績は——うーむ、文武不両道もいいところだな」

「え、老師。この子にするの？」

「ちよつといいなと思ってね。体力馬鹿そうだったし。とにかく、声をかけてみようと思う」

「え、ぜんぜんかわいくないよ、この子」

「なんで女ときたら、見た目ですべてを決めようとするんだ」

「綺麗なほうがいいに決まっているじゃない。ねえ、こっちのほうがいいんじゃない？」

「一人というわけにはいかないから、君のご推薦の四人だか五人のなかからも、何人か選ばせてもらいますよ。とにかく——」

スチュアートの目が眼鏡の奥で光る。

「時間が惜しい。この生徒の詳しいデータを、できる限りとってくれるかい。蓬萊市での住所と連絡先と」

「イエスボース」

小麗は敬礼すると、言われたことをメモしはじめる。ふと、スチュアートは、履歴の年号に目を通しながら、胸騒ぎを感じた。それが何か気付いたのは、

「二年前、二年前——平安人。学生——あつ」

あの、遭難事件。

新聞記事が脳内を横切つて、急ブレーキでとまる。

驚きを飲み込んで、スチュアートは、短い髪を細い指でかきまわした。

「もしかしたら……？」

テッセンというあの少年が、サンプルという可能性はないか？

いや、もしそうなら、平安が留学生にはしない？

しかし、あの事故でかなり死んだから——逆のパターン、つまり、留学しない生徒こそサンプルである、と思わせないために、あえて放出してみる、というのもあるかもしれない——

彼は、サンプルに対しての予備知識があつた。平安にそれがあるらしいということも知っている。二年前の事故の真相が、それらみでかもしれない、ということも。

もしもテッセンという少年がサンプルならば——そうでなくてもかまいはしないのだが——うってつけた。

武者震いに、のどの奥からうめき声がもれる。

ふと気付くと、何も知らない小麗が、不気味そうに彼を見つめていた。

「やつとツキがまわってきたぞお」

年齢に似合わない俊敏さで、五百メートル先のマテキ研究所へと走っていくスチュアートを見送った小麗は、玄関でやれやれと肩をすくめた。

「つまらないわあ。美少年のほうがいいのに」

さて、この一幕をまったく知らない留学生であるテッセンは、一キロ先の道場で寒気を感じていた。くしゃみまではしなかったが、道着から出た腕をこすって「蓬莱は空気が乾燥して、春なのに冷えるなあ」と、つたない英語でクラスメイトにもらす。それを聞いて、ジム・リーという、褐色の肌に亜麻色の髪を持つ、大柄な少年は笑った。留学中、彼を担当しているバディでもある。日常会話程度の日本語と広東語、英語を解した。

二人一組で柔軟体操をしながら、

「そりゃあ二ホンのほうが異常なんだよ。夏の京都に滞在経験のあるオレのひいひいばあちゃんが、オレがまだ小さいころ、思い出を話してくれたよ。印象に残っているのは、カビ——だそうだ。赤黒、黄色、緑、と。二ホンじゃ、カビがアニメーションになるほどなんだろう？」

母音を強調した英語で話してくれる。

「ふうん」

相槌をもらして、テッセンは、続けて友人がお手本として演じる型をまねした。

「カビとバイキンか。どっちも、まあ、たちが悪いところは一緒だもんな。たしかに、俺もごめんこうむるね」

「ごちゃごちゃうるさいぞ！ 留学生！」

「イエース、ソーリー」

師範の怒声に肩をすくめつつ、リーと笑いあったテッセンだが、もつとたちの悪いものが自分に近づいているとは、このときの彼は、思いもしていなかった。

平安学園高等部にも、多数の留学生が来ている。特筆すべきは一年生で、この年は、平安出身の生徒が特に少なかったため、クラスの過半数を留学生が占めていた。原因はもちろん、一年半前の事故によるものだ。さらにつけくわえると、彼らのクラスは、上と下の学年が2つの組にわけられているのと同じ、1つの組に、学年の全員がそろっていた。

また、この年は、一部のものにとっては、名前だけ知ってはいた生徒との初対面となった。中学のあいだ留学していた生徒が、帰国してきたためである。リョウヤとツキヨ、という二人の姉と弟か、兄と妹か……。年が同じで、まったく似ていない以上、やはり、彼らも義理のきょうだいであるのだが、その二人に、ちゃんと話しかけられたのは、リヒトは、その日がはじめてだった。

「ちよつといいかな」

リョウヤがまずやってきた。前衛類？の生徒らしく、はりつめた大きな体をしている。

「あの子のことなんだけど」

「あの子——ああ、」

リョウヤが一瞬目配せをした先に、光る銀色を見つけて、リヒトは目をすがる。

「ミューね。……なに」

「連中がね——お前とあの子の関係を気にしている。どうかね」

さらに視線を送った先に、留学生たちがいた。癖のある金や亜麻色や赤い髪 of 彼らは、リョウヤと見るとにつこりと笑って手をあげた。リョウヤが手を振りかえす。そこへ、ツキヨがやってきた。

「女子からは、君に用事はないみたいだね」

二人は、そろってリヒトのわきに並ぶと、左右対称に分けた前髪を揺らして首をかしげた。

「それはまあ、そうだろうね」

リヨウヤ自身がギンを気にしているわけではない、ということがわかって、多少、リヒトはほっとする。また、彼は、自分が目をひく容姿でも、これという特技の持ち主でもないことをじゅうぶん理解していた。

しかし、ああまた例のか、と思いながら黙ってあごに手を当てていると、

「で？ あの子とは、どういう？」

控えめに首をかしげたツキヨは、女子たちからの密命を帯びているな、とリヒトは見取った。

「何度も言つとおり、友達だけどね」

彼も首をかしげながら言つと、

「本当？ あんなに一緒にいるのに。選択の授業も一緒、休み時間も一緒、帰るのも一緒。気になる証言がぞくぞくなのだけれどもね」
「まあ、仲はいいかな。ミサビやテッセンやシルルと同じだよ」
「本当？」

リヨウヤが背後をふりむいて何かを言った。すると、留学生——ジョヴァンニ、アーネスト、ヨンニの三人がゆつくりと近づいてくる。リヨウヤの通訳をきくと、ジョヴァンニが小さく口笛を吹いた。彼は、空いていたリヒトの前の席に座ると、振り向きざまに顔を近づけて「ガールフレンドじゃない？」と首をかしげた。空と宇宙の境目の青い瞳が、好奇心をたたえている。

「本当？」

「本当だけど」

「じゃあ、いいのかな」

「何が」

「声をかけても、ってこと」

「かけたかったら、かけたらいい。自由だよ」

「そう？」

「そうさ」

彼女が相手にするかは別だけど、と小さく呟いたが、ジョヴァンニには聴こえなかったようだ。彼は、金髪を指にからませて離すしぐさを一度すると、す、と視線をすべらせる。そこでは、ミューが文庫本を読んでいた。

「あんな子は、よそのゲッターでもお目にかかったことがない。美しい、美しい——としか言いようがない。それに、頭もいいし、いいところのお嬢さんだって？ それと、天涯孤独の君が特に親しいと——ミサビではなく、君と、と。どうにも、見た目も中身もつりあいが取れないのが、ひっかかるんだけどね」

「そのままひっかかってれば？」

「面白いひとだね、君は」

「そりゃどうも。褒め言葉だと受け取るよ。しかし、だよ……ジョヴァンニ。彼女は君の思い通りになる子じゃない、ということだけは言っておく。怖いお兄さんが後ろについているしね」

「怖いオニイサン。それが君？」

「だったらいいと思う、とは、リヒトは言わなかった。」

「——見ればきつと、わかる」

それはもちろん、シンのことである。不思議そうに首をかしげたジョヴァンニをよそ目に、リヒトは軽いため息をついた。

誰も知らないが、リヒトはこの春、留学前のシンに呼び出され、忠告されていた。内容は、もちろん、ミューについてだ。退院後、徐々に接近しつつあった二人を、この、義理の兄が快く思っていない、ということのリヒトは感じていたが、あらためて思い知ったかたちである。開口一番言われた言葉は「馬鹿な真似はよしてくれよ」であった。松岡邸の広い一室で、荷造りを待つ小物や刀が、寝台に並べられていた。

「あの子は、サンプルなぞよりもっと、この先、重くなる存在だ」
凄みを増した美貌の男が、本気の声で告げたので、リヒトは黙ってうなずかざるをえなかった。彼はなぜか、病院で、リヒトがギンにした約束のことを知っていた。

「あれはまだ教育の途中だ。精神面のもろさが目立つので、そこをうまく君がなんとかして、一人前にしてくれたら、と思う。だが、やりすぎは困る。下手に未来に希望を持たせるのも、あやまちを犯すこともだ。なにしろ、あの容姿だからね。僕ら変化したものは、人が生身に備えているような質感を捨てざるをえないし、人工のハクに入っている以上、ある程度の肉体の汚れや、個性的な醜さなどと無縁になる。救いようのない不細工、というのがここにいないということとは、君も気付いているだろう」

「はあ、まあ……」

「僕にしても、自慢ではなく、人並み以上の容姿であるといえるだろう。しかし、あれは、そんなものの規格からも外れている。いつだったか、さる高官は、あれを、この世のセラフィムと称したよ。だから僕は、とても心配しているのだ」

にらまれて、リヒトは背に汗をかいた。しかし、

「そんなに心配なら、留学をおやめになつては？」

精一杯胸をはって嫌味を言うと、

「悪いが、できの悪い義理の妹のために、自分の将来を投げられないのだね」

彼は肩をすくめた。

「じゃあ、一つだけ教えてください。貴方が必要とする、彼女の素質、とは何ですか」

その瞬間、シンの表情が固まった。すぐに元通りになったが、粒子をすさまじい速さで動かしながら“見る”ことに全力を注いぐと――彼の、義妹にかけるなみなみならない思いが伝わってきた。

「あれは兵器になりかねない」

シンは低く言った。

「兵器？」

「いろいろなものを壊す。取り扱いに、細心の注意が必要な類の、人間であり、魂であり、力だ。君には、そんな心配は無い。ただの駒だからね、世界にとっては。しかし、ミューは違う――あれは、

本当に、突然変異体ミュータントのようなものでね」

絶対に傷つけたり失ったりしてはいけない——とシンは続けて言い、

「だが、君が、あくまであれにまわりつくトラブルの避雷針になる、というのなら、幼馴染として仲良くするのも大目にみよう」

最後に、譲歩した。

要するに、ボディガードとしてなら、仲良くしてもかまわない、ということだ。

——ずいぶんまだるっこしい言い方をする。これが金持ちのやりかたかあ。

貧乏人根性を覚えたリヒトだったが、本人いわく「自分を守ってくれた」「とても尊敬できる」と言わしめた幼馴染の兄である

。誓約書までは書かないにしても、「けして馬鹿なことはしません」と約束しなければならなかった。それに、今、この状況になってみると、自分があやまちを犯すかどうかはさておき、彼女が並外れて美しいから、という部分は、やはり肝に銘じておく必要があるように感じる。

ギンの周囲は、まったく、トラブルの火種で満ちていた。

留学生でなくとも、彼女を見つめる男たちの視線の多く熱いことといったら、毎日、呆れるばかりだった。

シンが留学してからというものの、ほとんど毎日、下駄箱の前で固まるギンの途方に暮れた顔。頻繁に送られてくる、差出人不明の花や菓子。通り過ぎるものはすべて、男だけでなく同性でも彼女を振り向いた。きけば、案の定、同性からも言い寄られたことがあるという。花街の近くでは、これが、熱烈なスカウトに変わる。兄不在の最初の一週間は、授業中以外、一秒たりとも目を離しておけなかった。

授業終了の鐘が鳴る。ジョヴァンニより先に立ち上がり、リヒトはミューに「行こう」と声をかけた。

「それとも——ミュー、彼らが話があるみたいだけど」

ジョヴァンニたちをさすと、少女は顔をしかめた。周囲にいるすべてのものに、あからさまに「いやだ」というようなものだった。すばやく文庫本をしまうと、立ち上がり、身支度を整える。彼女は武道芸術のどの部活にも入っていないので、放課後はフリーだ。いつも、リヒトの部活についてくるか、ミサビが今年立ち上げた、食餌研究部という、要するに調理部だが、そちらで料理や、留学する前はマチコに裁縫を習っていた。

「お先に失礼いたします。ごきげんよう」

形だけは穏やかに、ミューはお辞儀をする。やれやれ、と、リヒトも、鞆を持って外に出た。

「ちっ」

リョウヤは、聞こえてきた舌打ちに、ぎょつとしてジョヴァンニを見た。嫉妬、というには強すぎる炎が、彼らの淡い瞳に輝いていた。

*

弓道部の顧問であるシュウは、リヒトから留学生たちの話を聞くと、おかしそうに笑った。

「笑いごとじゃないですよ。毎日、毎日……それに、あの毛唐の連中まで加わるなんて、思ってもみませんでした」

「毛唐！ 言いますねえ、君も。立派に、毛唐の国の血をひいているのに」

「何代前の話ですか。俺は最初から日本国籍でした」

毛唐、とは、外国人をさす差別用語である。しかし、現世ではその意味が失われて久しく、ここでは、軽い冗談で使われる。実戦用の弓と和弓を使い分けながら、リヒトは、手にはめたカケの感触を確かめる。

背後では、文机にむかって、ミューが暇そうにノートを広げてい

る。彼が部活をしているあいだ、ここで宿題をするのが日課なのだ。
「力が入ってるよ。違う——力でひかない。震えるのはそのせいだ。
弓をひくのに力はいらない。骨だ。骨でひく」

「はい」

「スエタケ！ 指導を」

「はい」

シュウは、高等部でも相変わらずの昼行灯ぶりを発揮していたが、今年から、正式にソジ粒子操作実践応用の講師として採用されたので、多少、顔つきが厳しくなっていた。カエデ亡き後、リヒトのよき相談相手でもある。いつか市長から言われたシュウの「含むところ」が気にならないではなかったが、今のところ、全面的に信頼して、なんでも話すようになっていた。

休憩の合間に、彼は「そういえば、テッセンから聞いたんですけど」と、ふと、気になっていたことを口にする。

「最近、現世とゲッターは危ないんでしょうか？」

「ああ。あの発表ね」

彼が呟くと、そばで竹筒に口をつけていたスエタケも顔をあげた。

「重大発表、でしたっけ。もうすぐですよ」

「うん。人間側の新兵器らしいねえ」

彼は時計を見た。このところ、世間の話題はそれでもちきりだった。ここ二、三日のいつか、といわれていて、まだ速報は入っていない。準軍属である教師たちの焦燥に、生徒も浮かれ気味である。ジョヴァンニたちの、突然のギンへのアプローチも、ある意味では、浮き足立った雰囲気の変動、と思えなくもなかった。

ゲッターじゅうが、六月半ばのこの時期——雨と雲が空を埋める前の、繊細な一週間に怯えるようだった。

リヒト自身も、そわそわしている。しかし、江戸や明治や大正や昭和の町並みのなかで、外の現実世界とかけ離れた生活をしているので、人間側の兵器といっても、どこか遠い場所のことのように聞こえる。身に迫ってこないのだ。

「兵器つて——」

「どんなふうでしょう？」

「中露（中国とロシア）の共同開発だってね。それだけでじゅうぶん、穏やかじゃない。あちらさん、今回はなかなか強気に出て、歴史を変える武力、とか打ち上げていただけども——」

そのとき、鐘が鳴った。時間外の鐘で、連続して鳴り響くのが、時報とは違う。いよいよかな、と、いつも、のんきらしいシユウは、やりのんびりと呟く。彼もまた、腑におちない顔をしていたが、教師らしく顔をひきしめて道場の中に入ると、大きなラジオを持ち出してきた。

はつきりいつて、彼らはたかをくくっていた。

先のアフリカでの衝突も、人間側は、結局何もできなかったのがある。

ところが、その日は違った。

官界に広がった衝撃を、何と表現していいか、とつさには彼女にはわからなかった。彼女——藤原董は、新聞社に勤め、いつもはマテ研、ときどき政府の両方に張り付いている、うら若い美人（自分でいきを五割増しにすれば、そう呼べるかもしれないと思う）記者である。年は二十歳過ぎ、ばつさり首筋で切りそろえられた男勝りの断髪と、生々しい皮膚の様子が、人間である、ということを実現している。

その時刻、董は、ゲッターには十数台しかないといわれるテレビモニターに釘付けになりながら、ざわめく同僚たちの緊張と、つばを飲み込む音を、遠くに聞いていた。

政府内の記者クラブである。他の新聞社の部屋からも、あわただしい動きが伝わってきた。彼女のまわりでも、足の速い同僚の数人が、ばたばたと羽織やジャケットに袖を通し、大きなボストンバッグを抱えて飛び出していく。彼女は電話番号を任されていたので、その場を動くこともできず、ただじつとモニターに見入った。

「どこが渡した」

深刻な表情で腕組みし、呟いたのは、上司である。いつもは温厚な——変化した人間らしく、きめ細かな首の肌を見せた男だが、その横顔からは、怒りと苦渋が感じられた。

「なんだこれは」

彼がそういうのも無理はなかった。

公開されたテスト画像——

「ペトルーシユカ」

「ペトルーシユカ？」

董は首をかしげる。

「愛称だそうだ」

吐き捨てるように、ロシア語に堪能な男が答えた。聞き覚えのある名前である。すぐに董は、いつか父親に連れられて行った演奏会のことを思い出した。

ストラヴィンスキーのバレエ音楽。複雑なリズムと旋律にのせて、人形の目覚めと恋と破滅が繰り広げられる。ペトルーシユカは、人間の情熱と苦悩を持つ、主人公の、魔法をかけられた操り人形の名前である。

「操り人形……」

しかし、ペトルーシユカ、と呼ばれ、目の前の画面で縦横無尽に動き回るそれは、夢や叙情のかけらもなかった。

二メートル近い体幹に、太い手足が四本。その体には無数の銃眼がついていた。そこから飛び出した弾丸が、五百メートル先、一センチ四方の的を、正確に銃で打ち抜いた。さらに、その四本の手足にはそれぞれ刃物や銃を持ち、命令に応じて、人間の標本の首や急所を、次々に切り、突き、えぐる。滑らかで無駄の無い動きからも、最新型AIを搭載している、という言葉に間違いはないだろう。しかし、その、ベースとなっているのはまさしく――

「俺たちの、ハクだ」

上司は、椅子に座り込んでモニターを見つめ続ける。

「非人道的ってなあ、このことを言うんだよ！」

英語のナレーションを聞き取って、董も、全身の力がぬけた。なんとか椅子の上に着地したものの、体がふわふわと浮き上がるような感覚は消えない。

『ペトルーシユカ』は、すべての武器を体内に収納すると、くると振り向いて、その顔や体を視聴者に披露した。均整の取れた、生々しく艶のある体は、すさまじい熱を発するのか、汗をかいているようにも見える。そのせいで余計にリアルな皮膚は、柔らかそうに見えたが、先ほどの映像で、千五百度の熱にも、氷点下にも、戦車で轢かれても無傷である、という頑丈さは周知だった。その後、映像は途切れる。しばらくして画面に現れたペトルーシユカには、

豪華な衣装を着せられて、椅子におとなしく座っていた。服を着ると、本当に、羽化転生した人々の外見に似ていた。さらに、ペトルーシユカには仲間もいた。チャイナドレスをまとった、アジア人の容貌をした少女と、褐色の肌に、毛皮の外套の、筋骨隆々たる大男だ。

「こつというのがどんどん増えるんだろうな」

「大西洋連合も、ほかも、追従しないわけがない。次は何だろう。ピノキオか？ ル・プペ（お人形）か？」

「人間様は、ついに、自分たち自身で戦うのをやめるつもりだな。映画みたいだなあ。機械同士の戦争、か」

「軍隊までオートメイションとなると、金のない貧困層の子弟の就職先がなくなるなあ。なにしろ、軍隊ってやつは、兵隊になれば衣食住がただだ。かえって犯罪が増えそうだな」

「——蓬萊のマテ研から、実験用のハクが紛失したって事件があったな」

ぽつりと誰かが言った。それぞれ喋っていたひとびとは、いっせいに顔を見合わせる。

「こいつに流れてたってことか？」

「——かもしれん。医療用に、部品だけは現世へ提供する場合があるが——まるまる、一体は渡せないはずだ。それを、とうとう、やりやがった。アフリカの件があったから、今、公開したんだろう。たいした牽制だよ。この性能は、明らかに、対人用じゃないからな。対、俺たちだよ。実験ではいかににも見せているが、こいつらにもし、粒子を操作する力でも備わっていてみる」

「あ、とうとう言ったな。せっかく考えないようにしてたのに」

「ジャーナリストのくせに目を背けるなよ」

「うるさい、仕方ないだろ。俺は悲しいよ——本当に。馬鹿みたいだ……こいつらと、俺たちが戦う日がくるなんて、考えたくもないよ」

「世界が原始的になっっていく気がするな」

静かに言ったのは、最年長の上司だった。

「原始的……ですか？」

董の斜め前に座る、ロシア語の男が首をかしげる。董も不思議だった。機械人形の兵士が戦い、生身の人間の血が一滴も流れなくなる、というのが、どこか未来的に思えたのだ。しかし、上司は首を振った。

「ミサイルも戦車も核も、もう意味をなさないとわかったんだろう。武器、というものの限界が、とうとう訪れたんだ。とすると、最後は初心に帰るしかない。肉体と肉体、一対一の戦い。これは、そうだよ。俺たちと、フェアにやろうぜ、って、あいつらは言ってるんだ。同じ体で、同じ能力を駆使して——いや、同じ、かどうかはまだわからんが」

「たちの悪い冗談ですぜ。ゲッターに渡されている兵器といったら、昔っからの刀や、古臭い型落ちの銃や、そんなもんだけだ。核だって戦車だって持ってない。何にもしてないんだ。なのに、なんで、こんなもの作って見せびらかされなきゃならん！ こいつらともし戦になったら、戦わされる連中はなんて思う？ 俺たち自身と戦うのかって思うぜ……こいつらに、銃や刀を向けられるか？ うちにだって、有事のとき徴収されるやつだっているのに」

彼の怒りはもつともだった。

画面に映っていたのは、彼らと生き写しの——まるで、ドoppelゲンガー！

鏡の中の自分と戦えるか？

董は唇を噛んだ。肩身が狭すぎて頬が熱くなる。

「やりきれんだろうな。もうすでに、やる気を殺ぐって部分では、大成功だよ。これに街を包囲されたら、戦う前から絶望的な気分になること、間違いなしだ」

董はそこでうつむいてしまった。人間であることが申し訳なくなる——すると、ふと、隣の席の同僚が「お前、今日は歩いて帰るなよ。車呼んでもらえ」と、心配げに囁いた。

「え……？」

「念のためだよ。平安の人間にやあ、間違っても変な気起こすやつなんかいないだろうが、万一ってことがある。もしくは——たしか、弟がいたろう。多少無理を言っても、迎えに来てもらえ」

そんなことまで考えなくちゃならないのか、と董は思ったが、つくづく甘すぎる自分に愕然としながら、なんとか首を振った。

「弟は——今、留学しておりまして」

「そうか。そうだったな」

同僚は、難しい顔でうなづく。

あの子は大丈夫かしら——ふと、董の脳裏には、弟の姿がよぎった。胎児のときに変化する、という稀有な状態で生まれてきた彼女の末弟は、今、たった一人で、蓬萊ゲッターにいる。そうでなくても、彼は父親と衝突して、連絡が途絶えがちだ。もし何かあったら、亡くなった母に申し訳がたたない、と、董は、次々に鳴りはじめた電話に対応しながら、

「キャップ、さっきの話——蓬萊から盗まれたハクが、ってやつですけど——もし本当だったら、蓬萊やよそでは、どう受け止めるでしょうか。ハクを渡したのが、もし、そこだと本当にわかったら——問題になりますよね」

董が、上司の席へと顔をむけると、

「今ごろ、あっちの公安が出てるんじゃないかな。ゲッター同士で制裁は、ないと思うがなあ」

と、上司は、窓をあけて、使い魔を迎え入れながら言った。

「市長の記者会見、１９００から」

「他ゲッターへのパス申請を——」

「往来が途絶えたりしないでしょうか」

騒音の合間に、上司に尋ねる。

「どうだろう」

鳥たちの足からメモを外すのに忙しい上司の頭の中は、すでに、記事のことで埋まっているようだった。

応対に口を動かす董は、ふと、窓から入り込んできたモンシロチヨウの群れが、彼女の机の上にいつせいに止まったのに目を見開く。彼らは、羽から落ちた燐粉を、細い足でかき乱した。

「あ——ありがとう……」

オムカエニマイリマス、という文字列が読み取れた。董は、机のひきだしから角砂糖を置き、湯飲み茶碗の水を落とす。ほろりと崩れた砂糖水に蝶は群がり、しばらくすると、いつせいに飛び立って消えた。

「サヨウちゃん」

*

一方、蓬萊市。その日は、彼がこの地に留学して、ちょうど二週間めにあたる日だった。テッセンは、彼には珍しく、やや疲れを感じながら、中庭の道を急いでいた。すでに夕暮れで、次が、最後のレッスンだった。

とちゅう、妙なサイレンが鳴り響いたのが気にはなったものの、少林寺のレッスンはそのまま続行された。そのため、彼はまだ、ゲットーじゅうが受けた衝撃を知らない。

「疲れるもんだな」

カリキュラムは、おおよそ平安学園と変わらなかったが、彼を戸惑わせたのは、やはり、風習の違いであった。それはまるで、はじめて平安学園に来たりヒトのような気分である。

とはいえ、それは、馴染めないかもしれないという恐れではない。あまりにもフランクすぎる、蓬萊市の学生たちの態度が、この、ある意味では平安市の純粹培養——江戸から続く旧日本の気風を大いに反映した生活をしてきた——彼を、最初の恐慌に陥れつつあったのだ。建物も、行きかう人の様子も、いちいち、彼の目をくらませ

た。あの東京とも明らかに違う、別の異様な空気。

最初の一週間、彼は呆けたように、そのなかを必死で泳いだ。そのあとは、異邦人につきものの、異国を踏んだ興奮から冷めたときに忍び寄る疲労と倦怠感が、どつと襲ってくる時期に突入していた。ことに、二日前から、彼に異様に接近してきたひとりの男が、その不安をあおっている。

——ああ、リヒト。お前の気持ちがよくわかる。

それに、ミサビの作るおにぎりはうまかったなあ……

空腹をおぼえつつ先を急いでいると、いやな予感が脳裏をかすめる。それを見計らったかのように、

「ハイ！ テッセン！」

「またお前か」

独特の甲高い声に、うんざりと振り返ると、その男、スチュアート・チャンが駆け寄ってくるころだった。彼は、テッセンに追いつくと、彼の肩に手をおき、その感触をたしかめるようにして、眼鏡の奥の目を光らせる。

「——頑丈だね」

「だからなんだよ」

とても、三十近いように見えない男の手を肩から振り払って、テッセンはずんずんと歩く。

ふだんならそこであきらめるのだが、今日のスチュアートは違った。

「君は武術を学びに来たんだよね？」

「そう見えないか？」

テッセンは、いつもの道着姿である。これから、太極拳の指導を受けにいくところだった。隣に並びながら、スチュアートは、学者めいた表情で（事実学者なのだが）まじめに告げる。

「君は、あのイエルシャロムの事故に遭ったんだよね？ ちょっと、調べたんだ」

「だからなんだよ。そのときの話なら、なにも、話すことなんか

いぞ」

そもそも、彼が話しかけてきたのは、あの事故について聞きたいからだ。テッセンは思っていたので、さらにつっけんどんに「帰れよ、話すことは無い」と手をふる。

「お前はブンヤか？　でなくても、しつこい男は、俺は好かん」

「わかつてるよ。口外できないってこと、知ってる。で、それでさ、君は、武術を学びに来たんだよね」

「だから……。いい加減にしろ。なにがいたいんだ？」

テッセンは立ち止まって、スチュアートをいらいらとにらみつけた。

「何度同じことを聞くんだ？」

君は強い、君は武術を学びに来たの、強いということにどれだけ価値をおくのか。それは、初対面するときから繰り返されてきた質問だった。

「今日、事務で、君がショートステイで、ここから帰ったあとまた戻ってくるかどうか、わからないって聞いたんだ。だから」

「だから忙しいってのは、見てわからねえか。俺には時間がねえんだよ。早くどこかにいっちなまえ、このやろっ」

短い期間で、太極拳、少林寺、棒術など、アジアの武術をすべて学ぶつもりである。同級生にはしごく穏やかに、平安学園の評判をおとさぬように気をつけていたテッセンだが、スチュアートに対しては、口調がぞんざいになった。マテ研の職員らしいということは聞いていたが、ならばなおさら、この男に付きまとわれる筋合いはない。これっきりにしてくれ、というとしたとき、とうとうこの日、スチュアートは、意外な行動にでた。

「おい——おい！」

突然、テッセンは腕をつかまれ、そのまま、ずんずんとひっぱられる。広大な敷地の隅にある花壇のところまで来ると、スチュアートはようやく腕を放した。細いのに意外にも力強かった、とテッセンが呆然としていると「私だって一応、蓬萊でシヨウリンジをやっ

てたよ」と彼は弁解し、あたりを見渡して、ずりおちた眼鏡をひきあげた。

至れり尽くせりのハクを使用していても、まれに、視力が低下するものがある。ミサオのような、大人に見せるための伊達眼鏡ではなく、それが本物の眼鏡であることに、テッセンは今、初めて気付く。

ふと、妙な感じを覚えた。

マテ研の職員がなぜここまでして自分につきまとうのか、その意図は何なのか――

「一度だけ言っよ」

「……なんだよ」

「君は頑丈だ。体力がある。武術に意欲がある生徒だ。口が堅い」
「だから？」

「強い、ということに対して興味があるはずだ。だよな」

「まあな」

改めてたしかめるまでもない。彼は、自分の体の頑健さも、武術向きであることも重々承知している。力、というものを頼りにすることを、公言してはばからない。しかし、それがなぜ、蓬萊ゲッターの、このマテ研の研究者にとって重要なのか理解できない。

早くしろ、とどなりそうになったとき、スチュアートは勢い込んで、

「魔法に、興味がないかい？」

「はーあ？」

「魔法というものが現実にあつたら、素敵だと思わないかい？」

きらきら光る目でテッセンを見る。よく言葉の意味を吟味するのに時間がかかった。そして、理解した瞬間、テッセンを襲ったのは、途方も無いばかりさだった。蓬萊ゲッターという場所は、よくよく、平安市とはまるで違う。『自由の国のアジア』の懐の深さに、我知らず、イツアファンタジー、というつめきを、彼は漏らした。だまってきびすを返そうとすると、スチュアートがあせったよう

に「待つてくれ、待つてくれ」と、つたない日本語で引き止める。驚いて振り向くと「君のために覚えた」と彼はにやりと笑った。

「話を聞いてくれ。頼む。もう君しかないんだ。みんな、私の話をまじめに聞かない。私の仲間だけだ。でも、仲間はみんな解散させられた。チームはつぶされた。あの、くそいまましい、技術は金で買えると思ってるジャーナリストあがりの所長なんぞに——テッセン——そうだ！ 魔法、魔法という言い方が悪いか？ 浮ついて聴こえる？ だったら、そう——粒子の、まったく新しい活用方法だ」

「粒子の？」

「最近、マテ研各支部では、その技術を確立しようと躍起になっているんだ。だけど、ここで蓬萊が真つ先に抜けるとは、ありえない。私が一番進んでるんだ。進んでたんだ。あともう少しで——なのに、つぶされた。仲間は、それぞれ、他の支部に移ったりしている。私の技術を持つて。彼らはいまやライバルだ——このままでは先を越される。その前に——いまあきらめるわけにはいかないんだ。頼む、協力してくれ」

「それで何で俺に声をかける」

「あのニユース聞いじゃないの」

そこで、スチュアートは不思議そうに首をかしげた。

「あのニユース？」

「聞いたら、君だって、そんなふうにしてはいられないと思うけどね」

そのとき、スチュアートの顔に現れたのは、敬虔ともいふべき表情だった。

「そう、聞いてくれたまえ。このままでは、ゲッターは、人間たちにつぶされるよ」

「はあ？」

テッセンが抱いた感慨は、何を馬鹿なことを、である。彼はなにしろ、自分たちが人間よりすぐれている、と信じて疑わない人物だ

った。アフリカの件も念頭にある。核も戦車もミサイルもないが、ゲッターの優位性は、彼の中で揺らがなかった。時間を操ることができれば、変化した強い肉体があれば、神霊を許容する柔軟な精神があれば。まず、人間などに負けることはないはずだ。

スチュアートはしかし、彼がそう言うのと、静かに笑った。

「いつまでも人間が人間のままでいると思ったら大間違いだよ。彼らから僕らが生まれたように。彼らは僕らから、新たなものを生み出す。粒子が、霊魂の世界をこの世に結び付けてから——すでに世界は、ファンタジーと同化をはじめているのだ」

ナウ、デイスワールドチェンジドイントウファンタジー、とスチュアートは呟いた。

「君が、馬鹿にしようと、しまいと、そうなんだよ」

「そんなことは……」

「いや、している。君は、馬鹿にしてるよ。科学を。そのおかげで、君のハクと魂はこの世に存在しているのに。君に、その強さを与え、健康な精神を与えたのが私たちだというのに、君はその事実を無視している。まあ、無視してくれてかまわない。そのくらい些細なことだと思えるほど、私たちの技術が、君の生活になくてはならないものとして在る、ということなのだから。よくいえば、とても現実的だ。しかし——聞きたまえ。脳で科学を追う時代はとうに終わった。いまや、魂で科学を追う時代だ。科学は心霊と魔的になった。魔性なるものになった。そして、それらが一体となって向かうこれから未来、それは魔術——そして、魔法だ」

そう言い切って、うつむきがちにテッセンを見る眼鏡の奥の目に、なぜか、彼はぞっとした。けして大きくはないスチュアートの体が、夕日の中で何倍にも膨らんで、存在を大きくしたような錯覚に陥る。茜さす小道で、テッセンは、これから自分がどこへ行こうとしていたのか、すっかり忘れていた。

スチュアートは手をさしのべた。

「悪いようにはしない。君に、新しい力を人類が手にする、その最

前線を見てもらいたい。強さを追い求めて異国にまでやってきた少年には、たまらない申し出ではないかい？　もしもそれに危険が伴うとしても、だ。かえって腕が鳴るといふもの。サムライの国から来た君なら、難なく切り抜けてくれるんじゃないか、と、私はとても期待している。だから、再三再四、声をかけた。君ならばやってくれるだろうと——私がスカウトするだけの価値があると思ってね。それに、もし、途中で離脱したいというのならそれもかまわない。わざわざおとのうた客人である君に、蓬萊の土産話の一つ、二つ差し上げるのに、やぶさかではないんだから」

「途中で離脱？」

テッセンは、ひくりと眉をあげた。

「俺が？」

「ああ——君ならば、そんなことは考えないだろうとは思うがね。他の、候補者たちと違って」

その言葉は、テッセンが普段押さえつけている好奇心と、虚栄心をくすぐった。

どうやら、少年の心が動いた、と見て取って、スチュアートは笑みを隠す。彼にとって、テッセンは、これまで熾烈なポスト争いや順位争いを繰り広げてきた相手とは、くらべものにならない相手だった。

——だいたい、こういう腕力にものを言わせるタイプは、持ち上げて落として、持ち上げればいい。

そう思った次の瞬間には、スチュアートの頭はもう、別のことを考えている。

「夜、ここで」

彼が差し出した名刺の裏には、馴染みのカフェの住所が書かれている。

テッセンはそれを、黙って、おとなしく受け取った。

あるいは、受け取ってしまったのかもしれない。結局、彼は、こういう押しの強い人物には、本当はとても弱かった。

外は、今にも降り出しそうだ。

中庭で、紫陽花の手入れをする園芸部の部員は、頭に笠をかぶって作業をしている。脚絆に手甲をはめたその姿が、ミサビには、戦国時代の足軽たちを思い出させた。半円祠堂のまわりでは、色づきかけた薔薇が、可憐なつぼみをつけている。天候に左右される彼らの仕事に親しみを感じて、しばらく見ていたが、隣にいた少女の声で我にかえる。

手を柔らかく押し返す、弾力のある塊を成型して、型におさめると、部屋の隅の、一段低くなった土間に下りた。

平安学園高等部の調理室には、古いかまどがある。

煮炊きをするたびに熱い風に吹かれてめくれ上がる神札を手でおさえつけて、ミサビは、はぜる火の粉にもひるまず、火の加減を見る。留学生の一人が、熱心にメモをとりながら、一緒になってのぞきこんだ。

今日のかまどは石窯になっている。遠火にかけられた鉄板の上では、小麦粉と塩と水と酵母の混合物が、ふくらみはじめたところだった。蓋をしめてしばらくすると、香ばしい匂いがたちはじめる。「電気オーブンがなかった時代を思い出します。アジアの台所は、土と鉄ですね。ヨーロッパともまた、違います」

「そうだねえ。うちは、電気の供給が満足じゃないから、煮炊きの基本は、いまだにかまどだね」

彼のそばについているのは、地中海ゲッターからの女子留学生で、名前を、ベアトリーチェ・カタクラと言った。後衛類？に属し、補給について学んでいるが、本当に興味があつて学びたかったのは、各国の郷土料理だという。軍人志望ではなかったのだが、家族の仕送りなしで進学を希望する、となればこの道しかなく、やむをえず

高等部までできてしまった。父方に日本の血が混じっているのに、平安に来るのを楽しみにしていた、と、来校初日からあけすけによく喋り、語学が堪能なミサビにくつついて、熱心に質問をくりだした。

試食を終えて、全員で片づけをし、調理室の鍵を顧問に返却して、その日の部活は終わった。

「ずいぶん遅くなってしまったね」

途中、彼らもやはり、ラジオの緊急放送を聞いていた。そのぶんの時間がおして、学校を出る頃には、ほぼ、日が暮れかけていた。寮に向かう道すがら、どこかに立ち寄ることもできない時間だ。

ミサビは、ペトルーシユカについて誰かと話をしたかったが、食餌研究部の部員は、そういったことに興味の無い生徒が多い。

「お先に」と、ファサードで部員たちの群れを追い抜き、暗くなりはじめた道でひとり足を速めていると、後ろから足音がする。ベアトリーチェだった。

彼女は、竹林の一本坂道でミサビに追いついた。一気に距離を縮めると、彼の横に並ぶ。

「どうかした？」

次のメニューについてならまだ未定だよ、と言おうとしたとき、
「少し、話があったのです」

ベアトリーチェは、唇にひとさし指をあてた。内緒話のジェスチュア。それが、ずいぶん魅力的だったので、がらにもなくどきりとしながら、ミサビは首をかしげる。

「僕に？」

告白はないだろう、と、その程度の客観性は持っている。では、なぜ——学業上の相談なら、特に内緒にしくなくても、いつでも受け付けている。

「何か、クラスメイトと問題があった？」

「S——ミサビさん、あの子と仲いい、違います？」

「あの子？」

「ミューさんと。それから、あの黒い髪の、類？の男の子も」

「ああ」

リヒトね、とミサビがうなずくと、彼女は「そう」と顔をほころばせ、

「気をつけてほしいです」

早口でそう言った。

「え？」

ミサビは立ち止まりかけたが、ベアトリーチェは「普通にしてください」と、茶色がちの緑の目を、そつと左右にすべらせた。警戒している、とわかって、ミサビは言うとおりにする。あたりには、彼ら以外の気配はない。通学路となっている、真ん中にゆるい坂となった竹林は静かだった。ベアトリーチェはほつと息を吐く。

「他の人に聞かれないです」

普通の相談ではない、と見て取って、ミサビも表情を引き締めてうなずく。

「リヒトさんと貴方、親しい。彼に伝えてください。ミューさんのこと、目、離さないでって。うちのクラスの、私やアブドラたちと違う、あの、ジョヴァンニたち。あの子達、ちよつと、変わってます。彼ら、同じよその学校から来ているけど、目的、だいぶ違う。そんな気、する。あの子たち、ミューさんと近づきたいの、別の理由があります」

「ええと……」

ミサビも、放課後、彼らがミューに接近しようとしていた現場を見ている。それが、純粹に恋愛上のことではないと聞いて、驚いた。「どういうこと？」

「私もよくわからない。ええと……でも、たぶんあれ。そう——貴方たち、事故にあった。たぶん、それ」

「ああ——ひよつとして」

「ええ、そうです——あの噂……サンプル？」

最後の四文字だけ、風の音とほとんど同じヴォリュームになった。

「そう」

そうだったのか――

ようやく合点がいった。リョウヤがしきりと首をかしげていたの
で、なんとなくひっかかりを覚えていた。

「スパイ、ということだね」

ベアトリーチェの返事は、しかし、あいまいなものだった。

「諜報課の生徒は、授業とつて、そのこと、言わない。私にも、
本当はよくわからないけど」

「いや、じゅうぶんだよ」

表向きは単なる留学生だが、実は、ということは、ここではよく
あった。ジョヴァンニらの目的が、事故の真相や、サンプルの存在
について探ることだったとしても、驚く理由はない。彼らは、それ
ぞれ、地中海、イス、ロンディニウムの出身で、そこは、ゲット
ー連合の首脳にあたる。そこからの留学生といえは聞こえはいいが、
そのなかに、純粋に学業目的ではない何かが混じっていてもおかし
くない。

まして高等部ともなれば、彼らは半分、大人の領域に片足をつつ
こんでいた。

しかし、ベアトリーチェは、ジョヴァンニと同じ地中海の出身だ。
君が教えてくれたのはなぜ、とミサビが尋ねると、少女は少し考え
て、

「友達だったから」

「友達？」

「はい。彼から手紙、もらいました。貴方のこと、書いてあった。
私、フリオの友達だったです。覚えてますか。フリオ・カーデ」

「フリオ――フリオ。もちろん、よく、」

あの事故で亡くなった留学生のひとり。同じく、地中海ゲットー
の出身者。突然、胸の中を風が吹き抜けていった感覚をおぼえなが
ら、「すまなかったね」と思わず彼が謝ると、ベアトリーチェは「
いえ」と長いまつげを伏せ、首をふる。

「いいえ。そのこと、私、気にしてない。不幸な事故と思います。貴方、とても彼によくしてくれたときいた。私、感謝しています。でも、そうでない人もいる。彼ら——ジョヴァンニ、フリオとそんなに親しくなかった。でも、あの事故が平安の陰謀だといって、敵討ちする、思っているひともいます。だから、気をつけて。彼ら、ミューさん気にしてます。あの銀髪のひと、あまりに綺麗すぎる。他と違う。だから彼ら、サンプルが彼女だと疑ってる。あのひと、そのくらいすごいです。なんというか……まるで——」

ベアトリーチェは、同性として複雑でもあるけれど、というようなことをイタリア語で呟き、その後、雨の降り出しそうな暗い空を見上げて、

「天使みたい。そう言ってます。私たち——よそからきたひとたち」と言った。

なるほど、天使か、とミサビは内心で、第三者からいわれて気付いた発見をかみしめる。

紫陽花の生い茂る小道を抜けた。

——彼女が、そうだと……？

ミューがあゝの事故の当事者ではないことを、ジョヴァンニたちはとくに知っているはずだ。もともと一つ上の学年にいたことは有名だし、あのときの入院には、別の理由がつけられている。なのに、なぜ、ミューをサンプルだと思っているのだろうか。綺麗だからという理由は、あまりに単純すぎるのでは？

どこで誤解したのだろう、とミサビは考えたが、容易に結論は出ない。

女子寮の前に来ると、ベアトリーチェは「じゃあ」とほっとしたように笑って、門の中に入っていった。ミサビも、反対側の通りにある男子寄宿舎へ入る。在籍板に在寮札を掛け、早足で部屋に向かった。

「ただいま」

部屋は、窓が全開にされ、湿度とつめたい風が頬にふきつけた。

屏風の向こうで「おかえり」と、ものうい声があがった。

「雨、降らなかったか？」

「まだだよ。なんとか」

着替えて、屏風の向こうに「いい」と声をかけると、「いいよ」と返ってくる。風呂敷包みを手に入り込むと、シルルは、ベッドの上に座って、ぼんやりと宙を見ている。そばには、書きかけのノート——今日、休んだぶんの課題をこなしていたのだ。

「調子は」

「だいぶいい。出席日数が、やばいな。明日はちゃんと行くから」頭をかきながらそう言った。のばしたままの、癖のある髪がくしやくしやになっっている。ミサビを見ると、緩慢な動作で髪と服をなおしはじめた。

「そう。ご飯は？ 食べられる？ 部活でパンを焼いたから、持ってきたよ。夕食前だけど、いいでしょう？ お茶いれるよ」

ポットを机の上に探したミサビは、そこに、綺麗な菓子の包みを見つける。

「これは？」

「なんとかってやつ。留学生の。お隣にいる——そいつが、郷里のなんとかって。もらったよ、お前のぶんも」

「そう。ありがとう」

ヨンニか、とミサビは納得する。北欧出身の、細身の少年。ジヨヴァンニと仲がいい。

彼もか——

ひっかかったが、病床にある友人に、余計な心配をさせたくなかったので、シルルには、黙っていることに決めた。

シルルは、窓のほうを見ている。血の気のない、能面のような表情だ。

「ラジオ、聞いた？」

ミサビは、お茶のカップを手渡す。シルルはパンを食べ始めていた。こうして、ものを食べているところを見るのは久しぶりだ。「

「うまい」と呟いて、微笑をみせたシルルにほっとしながら、自分も湯呑みに口をつける。

「聞いた。大変……なんだよな。こうしてるぶんには、とても、現実とは思えないが」

「そうだね。どうするのかな、上は」

「もうじき市長の記者会見だつてよ。ラジオ、聞かなきゃな。リヒトとグエンも呼んでさ。テッセンはどうしてるかな。あいつ、蓬菜で、うまくやってるのかな」

「元気みたいだけどね——ひゅうが、ひゅうが！」

呼ぶと、ミサビの相棒である三毛猫が、赤いモスリンのリボンを翻して、窓からやってきた。

「なあにい、お二人さん。しけたツラねえ」

彼は、人間くさい動作で首をかしげると、前足で、湿った顔とひげをなでる。笑っているシルルをみると、ミサビにだけ分かる、かすかな表情の変化を見せた。そのまま、スフィックスのポーズで、机の上を陣取る。

「いいからさ。ねえ、テッセンから、なんか言ってきてない？」

「元気よ。アルリシャいわく」

「今日は？ テッセンなら、絶対、ペトルーシュカについて何か言ってると思うんだけど」

「今日はまだだね。ねえ、ぺと——ナントカ、って、そのせい？ 街じゅう、なんだかざわつとしてるのは」

「ああ。感じる？」

「ええ。なんだかねえ。魂の模様がめぐるしいの。ヒトの形がおかしいの。人心惑うときは我らもまた——あんたたちと契約する時代になってから、私たちだって、ちょっとは変化してんのよ。お偉方も、久しぶりに集会に顔を出したし」

「ん？ 誰のこと」

「舶来の賓客がいらっしゃるのよう。でもこれは、あんたたちには関係ないわ」

あつさりと言って、ひゅうがは、パンのかけらを要求した。

「夏が来る前には梅雨があるものよねえ」

彼が、桃色の鼻先を向けた窓の外で、雨が降り始める。宵闇に銀糸が垂れ下がるように、行灯の明かりに雨は光る。

雨音は不規則だった。

ひゅうがは、尻尾を振りながら屏風の外へ出た。シルルがパンを食べ終わって、着替える、と言ったので、ミサビも、茶器を片付ける。続いて出ようとすると、背後で「そういえば」とシルルが声をあげた。

「せつかくなのに、今年も出さないのか」

「——ああ」

自分のスペースへ入り込んだミサビは、足元に目をおとした。くずかごには、封を切られないままのインヴェーション。

「いいんだ」

なぜか、声には微笑が混じった。シルルは「そう」と低く呟き、そのまま、どさりとベッドに倒れこんだらしい音がした。

「お前がいいなら、いいんだけど。——リヒトはつくづく、幸せだよ、な」

「そう?」

「そうだよ」

声にあるとしたら、このシルルの声は透明だった。何の感情も無い。

嫉妬すら。

それが、妙にミサビの背筋をぞっとさせた。彼は、あわてて言う。「明日は、晴れるってさ——それで、ちゃんと太陽の光をあびて、ご飯を食べたら、シルル。元気になる。前向きに、考えることができるよ。大丈夫。明日、行くんでしょ。たたき起こすからね」

シルルは答えなかった。

ミサビは、くずかごからインヴェーションを拾い上げ、それがなにか分からないほど、静かに、びりびりに引き裂いた。

その日、蓬萊市はあわただしかった。朝から、もののしい雰囲気、制服の男たちが出入りするのを、マテ研の職員たちはいぶかしく思っていた。しかし、あの放送後、彼らはようやく納得した。と同時に、窮地に立たされることになった。

「うちから盗まれたものがなぜ、今になって」

“ペトルーシユカ”の原型が、蓬萊から盗まれたものであることは、まだ発表はされていないものの、彼らだけには明らかだった。製作や細工や保管に携わっていたものは真つ青になって「駄目だ、駄目だ」を繰り返し、事務方は、鳴り響く電話の応対に追われた。しかし、

「ついに、軍事利用されたか」

一種の諦めが、彼らの間にはあった。魔的研究所は、設立当初から、人間側の諜報活動の対象だった。研究所が生み出すハクは、外界で使われる作業用アンドロイドの技術にも一役買っていて、この特許は莫大な利益をあげていたから、製作の全過程を刻まれた設計図でもあるオリジナルのハク一体をまるごと手に入れる機会を、人間側は虎視眈々と狙っていたのだ。作り方さえわかれば、あとは、法律でなんとかなる。

そういうわけだから、どのゲッターも、人間側からのスパイにはじゅうぶん気をつけていた。しかし、盗難を防ぐためのセキュリティは、もともと、人間側から譲られたものだ。改良を施してはあったものの、内通者がいればたやすい、とかねてから言われていた。なぜ蓬萊だったのか、というのは、問題にならなかった。どのゲッターでも、起こるときは起こるだろう事態だったのだ。ただ、かね

てから予想できた被害ではあったので、なぜ防げなかったのか、問題はそこだった。何にもまして、いまだに犯人が拳がっていない、ということが、彼らの不安と苛立ちを倍増させる。ペトルーシユカに使われたハクが、十年前に盗まれたものであったので、怒りは、いまだに事件を解決できていない、自分たちの仲間である警察にも向けられた。

その日、やってきた公安警察や軍の関係者は、ハクの盗難を手引きしたであろう、内通者を調査するものたちだった。私服であろうが制服であろうが、鋭い眼光に直線的な態度は、あきらかに、職員や研究者たちとは違う。マテ研のものは、驚異の目を彼らにむけたやがて、夕方には玄関ホールを埋めるほどになった彼らに説明するために、所長までがやってきて、押し問答が繰り広げられた。

「困りますよ、あたりかまわず入られては。ここは、普通の場所とは違うんですからね」

「何を言うか。正当な捜査だよ、これは。だいたい、さつさとすませたほうがいいのじゃないかね。ん？ 他のゲッターからは、第三者の捜査機関に委ねるという声もあるんだよ。これは、蓬萊市の信用問題だ」

「だからって、研究所を、そこらへんの共産主義連中やカルト教団と同じに扱われちゃ心外だ。誰も、捜査を拒否するなんて言っていない。穏便にやってくれ、というんだ。そんな、ガタイのいい連中にうろつかれちゃ迷惑千万ですよ。まずは警備課で話を聞いて、彼らにやりかたをおそわってください。ここには、精密機械がわんさかあるんだ。あんたらみたいな埃とバイキンの塊が、ひとかけらでも垢をおとしてみてください、うちは商売あがったりだ」

「こっちはね、営業停止してもらったっていいんだよ」

「——ここは、そこらの商店とは違います」

スチュアート・ヒルガーの横から、一歩前に出て彼らに言ったのは、彼らに勝るともおとらない体格と上背を誇る、ジム・レイノルズ・リーであった。魔的研究所蓬萊支部で、もともと研究者たちを

統括していた老紳士で、今は、役員のひとりだ。彼は、警察官たちだけでなく、上司であるかたわらの所長までを、押し隠した胡乱な目で見ながら、

「営業を停止？　いうにことかいて、営業、ですって。ビジネスですって？　看板を間違えています。ここは、研究所です。そもそも、あなた方に口を出されるいわれはないんだ。ここにいるものの大半は、自らが負うところの研究の責任を果たす、学究の徒であり、昼夜問わず世を動かす、ひとつひとつ精密な歯車だ。その歯車を止めることは、進歩をやめることです。警察がなんぼのもんじゃない。FBIだろうがKGBだろうが人民軍だろうが、礼儀をわきまえないなら、こちらにだって考えがありますよ。魔的研究所が、市にいくら税金をおさめているかご存知か。うちが、どれほどの利益を蓬萊ゲッターにもたらしているかご存知か。あなた方に給料を払っているのは私たちといってもいいくらいです。なぜそんなに威張っているのか、聞きたいね。あなたたちこそ、どうして、十年前、通報したときすぐに犯人を捕まえてくれなかったのか。そちらさんだって、ハクの流出を水際で阻止できなかった責任がある。いまさら大勢で来て、威張られてもねえ、腹がたつのももつともだと思いませんかね」

おお、というどよめきと拍手が、いつせいにあがった。苦情を申し立てに集まっていた、関連部門の職員、研究者たちが、リーに従う。

「そうだそうだ！　だいたい、警備課にいるあんたらの下っ端がちゃんとしないから、ハクが丸ごと盗まれるなんて格好悪い恥をゲッターじゅうにさらすことになったんじゃないか」

「仲間を疑うなんて、筋違いもいいところだ」

「盗んだ奴が悪いというんなら、人間のほうにむかって、犯人の調査と引渡しを要求するのが先だろ」

それに対し、警察の先頭にいた男が、

「しかし、だ。内通者がいるのは確かなんだ。君たちだって、仲間

内にそんなのを抱えていたくはないだろう」

たまらず大声をあげる。とたんに、反論の津波が彼に押し寄せる。「あれから十年経ってるんだぞ。そのあいだに辞めていった奴らがいくらいと思うんだ。とつくに辞めてるに決まってるあ」

「そうだそうだ」

「給料泥棒！　ちゃんと働け！」

しかし、職員たちの防波堤になったのもまた、リーだった。彼が「とにかく！」と両手をあげて叫ぶと、その場はしんとしずまりかえる。

「とにかく、調査をするのなら手順を踏んでいただきたい。まずは、その、人相の悪い連中をいったん外に出してもらいます。所長の言うとおり、ここには、一ミクロンの塵や埃で駄目になる実験途中のものもいるし、重大な菌類を保育しているものもいる。貴方がたの身の安全を保障できない研究をしている部門のものもいる。容易に開けてはならない扉ばかりなのだ。いいですね」

「彼のいうとおりだ——そういうわけだ。とにかく、方針を話し合おう。私は、これから、市の上のものと話があるので失礼するが、リー、君に、調査関係のことは任せるから、よろしく頼むよ」

所長が横から早口で言うのに、リーは一瞬いやな顔をしたが、所長命令とあらば、というふうに「わかりました」とうなずいた。ヒルガーは、あからさまにほっとした表情で、その場をよろけながら去っていく。残された双方の職員たちは、しばらくにらみあいが続けていたが、リーと、警察捜査陣の代表——デユカキスが、はじめに話し合いをはじめると、やがて、潮がひくように、それぞれの持ち場へ戻っていった。職員たちは、分厚いセキュリティ・ゲートの奥へ。捜査員たちは、冷え込み厳しいマテ研の正面玄関から外へ。

夜空の下に放り出された捜査員は、不満たらたらのまま、待たされることになった。彼らとて、同じ市の、変化した仲間を疑いたくはない。しかし、これが仕事なのだから、責められる筋合いはないのである。

「ちつ、厄介なことになったなあ。それもこれも、あの操り人形のせいだぞ」

「職員の中に、学校の同級生がいたな。顔を見られちゃった。俺、公安だつて、ばれたかな」

「お前のその変わりようじゃ、生みの親だつてわかるめえ、杞憂杞憂」

群れの端に所在無く立っていた、彼らの中でも若い捜査員の一人は、ふと、研究所の植え込みを横切っていく複数の人影を見つけた。妙な組み合わせのグループだった。白衣の男の後ろに、少年が二人と少女が一人。彼らは別の入り口のほうへと歩いていく。少年たちは、正面玄関のものものに驚いていたが、先頭の眼鏡の白衣男は、わき目も振らずに歩いていった。それは、古代から変わらぬ学者のイメージそのままの人物——ビン底ほど厚みのあるレンズの眼鏡、くしゃくしゃの髪、痩せ型、前かがみの大股歩き。あまりにも凶鑑どおりの姿に、彼は思わず目が離せなくなる。

やがて、四人は視界から消える。若い捜査員は、先頭にいた学者めいた男の面影を、かつて知る後輩と重ねた。

「チャン——チョウだったかな、リヤンだったかも」

「何をごちゃごちゃ言ってる、新人」

「あ、はあ、すみません」

彼は判断を誤った。疑問を感じたそのままの心を信じて、すぐにその学者を掴まえるべきであった。そうすれば、彼がこれからしようとしていたことを、未然に防げたはずだった。

しかし、男はやがて、そのことを忘れてしまった。

*

さて、かつての先輩に目撃されたとも露知らず、スチュアートは、テッセンとミシェル、エレナという高等部の生徒たちを引き連れて、裏口から魔的研究所へと入った。長く狭い廊下から、すぐに分厚い

扉に行き着く。

事件に意気消沈する他の職員たちと違って、彼は、千載一遇のチャンスに小躍りしたい気分であった。ペトルーシユカは、彼にとつて、絶望でなく、幸運の女神だった。騒動が続く限り、彼が何をしようとして、きつと、誰も関心を払わないに違いない。関連部門が休業ということになれば、それもチャンス——遊んでいる機械類が自由に使える。最後の仕上げには、この時をおいて他にない。本当に運が向いてきたかもしれない——学生たちの前でなければ、鼻歌でも飛び出しそうであった。

足取り軽いスチュアート。

反対に、テッセンの足取りは重い。

指定されたカフェに行ったとき、彼を待っていたのは、喋ったこととはないが、お互いに留学生だとは知っている上級生や同級生で、気まずい挨拶のあと、今も一言も言葉を交わしていない。

男はアッシュブラウンの髪のミシェルで、おそらく、イースカロンディニウムの出身。女は濃い赤毛のエレナ。たぶん、ロンディニウムか、そのほかの英語圏。両方とも、一見して頭脳派タイプであったので、余計に声をかけづらかった。彼らは、母国語が同じなので、かなり早口で、二人だけで話をしている。テッセンは輪に入れず、黙りこむ。

しかし、研究所の奥へと進むにつれ、彼は、気まずさを忘れた。初めて見る、魔的研究所の最深部に、ひたすら目を丸くする。

ゲットーの街並みが、必要に迫られて近世風に古臭くされているとするなら、研究所は、業務上の必要で現代の最先端を反映している。ふんだんに使われたガラスやセラミック製品、コンクリートや鋼板を、やがて、沈黙を破って「まぶしいですね」と、彼にもわかる速度で、少女が表現した。

「光が、こんなに——」

天井には、影まで蒸発しそうな強い光を放つ照明。

「ぜいたくですよ、つくづく」

魔的研究所は、独自の発電施設を持ったため、電力を使いたい放題に使っている。それが、不便な生活を強いられている学生には、うらやましくて仕方ない。平安市の節電生活に慣れたテッセンでさえそうである。彼らは肩をすくめあった。多少、気まずさが緩和された。

「木造の部分はないんですか？」

「木い？ 木なんか危なくて使えないよ。魔的物質を扱うんだからね」

スチュアートはそう説明しながら、バイオセンサーに顔を近づけ、指を差し入れて、名を名乗った。彼にとっては見慣れた光景なので、学生たちの驚きなど、フォローする気は毛頭ない。

「スチュアート・チャン。ゲスト三名」

暗証番号を叩き込むと、静かに扉が左右に開いた。

「はい、さつさと入るよ。急いで、急いで」

廊下に三人を促して、再び歩く。彼の居室は、一番奥にある。生徒たちは、パンかなにかの一つのカタマリのようにになってついてきた。ゲートをぬけて、ふたたび緊張した様子である。

「そんなに固くならないでくれ」

「そう言われましても」

「ねえ」

彼らは、それぞれ自国のゲッターで、自国のマテ研に行った経験があった。しかし、スチュアートのような、健康管理にも医学検査にもタッチしていない研究者の領域には、踏み込んだことがない。しかも、彼のいる部門は、もっとも安全性への配慮が必要な場所だった。つまり、もっとも危険だということでもある。警備レベルも高い。

こんな場所を使っているなんて、マテ研のエリートというのは本当らしい、と学生たちは、スチュアートに尊敬の念を抱き始めていた。テッセンも、“胡散臭い”から、“意外としっかりしている”へと、形容詞を百八十度変えた。

しかし、「ここだよ」とスチュアートがドアを開けた10平米ほどの広さのその部屋に入ると、彼らは一氣にがっかりした。あまりに室内が乱雑だったためである。

壁を埋め尽くす本棚には、あふれんばかりに本が詰まっていた。多数のコンピュータが巨大な机の上に置かれ、そのすべてが起動している証拠に、混ざり合う極彩色のスクリーンセイバーが夜光を放つ。投影された画像——無数のデジタルの熱帯魚は、空中をゆつくりと泳ぎまわっていたが、スチュアートが照明をつけると、姿を消す。がらんとした空間で、あらためて、室内の乱れが強調される。

スチュアートは、近くの床に積まれていた本を蹴飛ばすと、学生たちに椅子をすすめた。てんではららの椅子に三人が座ると、まもなく、熱いコーヒーが提供された。

「さて。では、まずは、ガイダンスといこう。今日はもう夜も遅い下に、わけのわからん連中もいたし、学生たちをここに連れ込んでいるところを見られたら、何を言われるかわからん状況ではあるからね。手短にすませる。ええと——ミシェル、エレナ、そしてテッセン。まずは、君たちのカードを貸していただきたい」

テッセンは、自分の首からカードを外して、スチュアートに渡した。

「それから、仲間を紹介する。スリジエだ」

ドアが開いて姿を現したのは、三十歳を過ぎたころであろう、黒髪のアジア系の男性だった。三人を見ると、にこやかに頭をさげて、ひとりずつ握手をかわす。

「はじめまして」

「実験中、彼に、君たちの状態をモニターしてもらう」

スリジエは、カードを受け取ると、手にした棒のようなもので、カードの情報を読み取りはじめた。学生たちは顔を見合わせる。カードには、市民番号や保険番号、病歴など、彼らの個人情報が入っている。不安そうな顔の彼らに、スリジエは「大丈夫だよ」と微笑んだ。

「異常があつたら、すぐに救出措置をとります。これは、そのための準備」

「救出——」

「そう。私の実験は、そういう事態になるかもしれない内容を持っている。だから、はじめに説明しておく」

スチュアートは、デスクの端に腰掛けて、前のめりに両手でカップをつつむ姿勢で、あたりを見渡す。

テッセンは、彼の近くの本棚に、「中世期の魔女」「錬金術の歴史」というタイトルの背表紙を見つけて（そのタイトルは簡単な英語だった）、顔をしかめた。ふたたび、胡散臭い雰囲気のスチュアートに漂い始める。まっすぐに家にかえるべきだったかな、と、今ここに来た自分が嫌になったとき、スチュアートと目が合った。黒い瞳が放つのは、知性の光。テッセンのもっとも苦手なものだ。

後悔が増す。場違いだ、と思った。

だいたい、彼は、魔法というものをまだ信じていない。基本的に、そういう、空想の話は嫌いだ。

かつて、あの東京で、ミチタカのがらんどろになったハクを前にマチコにむかってそういったように、今も、その気持ちは変わらない。

くだらない、と思う。そのはずだ。

だけど——？

エレナとミシエルは神妙にしている。

彼らは、本当に魔法というものが現実になると信じてここにやってきたのだろうか？

俺は——期待なんかしてないはずだがなあ。

テッセンが、自分にむかってそう問いかけたとき、

「この世にある科学の原始的な状態は、いまや、歴史の奥に封印されている。しかし、今ある科学の状態から、過去を予想することはできる。私はもう一度、人の思想や理想が行き着くべき場所を、過去にさかのぼることで確認しておきたいのだ。私が、これから君た

ちの協力によって作る新しい概念——魔法について「
いよいよスチュアートが、それについて語りはじめた。

3 魔法

「君たちのなかには、一度ならず、魔法というものが存在する世界に触れたことがあるものがあるだろう。ゲーム。コミック。物語。舞台。ドラマ。すべて虚構だ。虚構の世界の虚構の力を、君たちは楽しんだ。純粹に、娯楽として。違うかい？」

「ええ。覚えがあります」

洗練された仕草でカップを口につけて、アッシュブラウンのミシエルがうなずいた。

「夢の世界ですね」

「夢の世界。そうだ——私もそうだった。私は子どものころ、そういった世界にととても憧れた。たぶん、君たちの誰よりも、いや、世界中の誰よりも、憧れたといっていい自信がある。夢みる、などという言葉では言い表せない、ファンタジー狂だった。およそ魔法や魔術というものが存在する世界なら、見たり読んだり、プレイしたり、それに若者だった時間の大半をつぎ込んだ。変化してからもそうだった。私は、“あちら”の世界にほとんど同化していた。そして、魔的物質というものを見るに、これは、私が夢見た世界への鍵であると確信した。君たちは、」

スチュアートは、眼鏡をおしあげる。

「考えたことがあるだろうか。虚構の世界のキャラクターは魔法を自由に使える。そのキャラクターは人間である、と、それについては疑ったりしなかったかい」

「はあ……、どういう？」

「人間が、呪文を唱えると、ただちのその人物の手から火がふきだす。大量の水がほとばしる。風が起る、地が震える。そんなことをしている主人公は、平然と無傷でいて、女子どもにきゃあきゃあ

言われている。しかし、よく考えてみたまえ。そんなことができるやつは、人間か？ 手から、敵を致死させるほどの高温、高質量の火を出して、そいつ自身はどうして火傷をしないのか？ 溺れないのか？ 吹き飛ばないのか？」

「それは、言わないお約束だと思えますけど……」

多少、呆れを含んだ声色で、エレナが赤毛を揺らして首をかしげた。

「まじめだね、君たちは」

逆に、呆れたような顔でスチュアートは肩をすくめた。エレナがむつとするのが、隣にいたテッセンにはわかった。

「私はそれが疑問だった。ゲームのグラフィックなどを見るにつけ、さらに疑問だった。ファンタジーのキャラクターたちは、みな、美形であり、かつ、身体的に、とてもないフィギュアをしている。

当たり前のように八頭身、九頭身で、筋肉などまったく無いように見えるのに、五メートルのジャンプを助走なしにやってのけ、体重の五倍はある巨大な剣を難なくふりまわしている。無重力状態にあるようには、とても見えないようなのにね。さらに、さっきもいったように、火を出すやら水を呼ぶやら。大道芸人も真つ青だ。マジシャンも裸足で逃げ出す。なにしろ、彼らには、マジックの種などなにもないのだからね。仕込みなしでそんなことができる人間がいるものかね。そんなことができる奴が居たら、そいつは人間じゃない。もういちど言おう。人間じゃない。さらに言えば、絶対に、必要的に、論理的に、人間じゃない」

「人間じゃない」

スチュアートから、視線によってもそれを強調された三人はそれぞれ呟いて、顔を見合わせた。

「ええと、じゃあ……」

「しかしながら、人間に見えるのだから、それは、人間でないが、人間の姿をしているもの、だ。つまり、私たちのことではないのかと私は考える。羽化転生した人間たち。私は、転生後、真つ先に思

ったよ。なるほど、まわりを見渡して、これは魔法の世界かもしれない、と。で——ゲッターや現世の差を測るのに、美形率、というものがあるのを知っているかい。これは、素面で考えるとちよつと笑えるデータだけだね。ええと、美人というのは、ここでは、芸能プロダクションのスカウトが、思わず街で声をかけてしまうほど魅力的な容貌を持つ、というのを点数化して平均した数値らしいが——現世の人口とゲッターの人口を比率で見ると、ゲッターにおけるいわゆる“美人”率というのは、驚くなかれ、じつに三割を超える。現世では、一割をだいたい下回るのに。つまり、ゲッターには美人が多いということだ。十人のうち、実に三人が、男女の関係なく、そう呼べる種類のものだということ」

テッセンは、ミサビとミューを思い出した。他の二人も、かすかにうなずいた。思い当たる節があるのだろう。

「そして、さらにその上をいく“超美人”率が、その三割のうち一割。こちらは、現世では、もう、ほとんど、天文学的数値になる。そしてまた、体型の黄金比率に至っては、ゲッターでは、九割までが、現世の理想体型の範囲内にあてはまる。つまり、私たちは、人間の理想なのだ。ファンタジー世界のキャラクターを務めるのに十分の条件を備えている」

「見た目だけでそう判断を下されたんでしょうか。チャン——先生は」

「スチュアートで結構。いや、まさか。ただ、私は最初にそう思った、というだけだよ。そして——」

彼は、カップを置いた。

「魔的」

彼は、リズムをつけて指を鳴らした。

とたんに、ものすごい速さのものが、彼らにむかって、正面から飛んで来る。テッセンは、そのままの軌道なら頭に直撃するだろうアルミのボールを、手のひらに掴み取る。他の二人も、それぞれ、ボールを手にとっていた。

「ブラヴォー」

スチュアートは手を叩いた。顔を見あわせる学生たちをよそに、話を続ける。

「この能力だ。時間を操る、というね。いや、時間だけではなく、空間も。この二つは、つねにセットだ。そして、それら両者のあいだを自由に行き来するのが、私たちを変化させた魔的物質。われわれが制御できるのはまだ一部分だけで、その一部分だけでもかなりの問題なわけだが——ときおり、遭難が起こるのが、その、われわれが制御できてない証拠のようなものだ。粒子の運動を抑制したり、移動を遮蔽するものを身に着けたりすれば何とかなる、ということの研究がすすんでいるがね。そう——しかし、われわれが、他の時限へ、時間軸へと行くことができるのなら、その逆だって可能なのではないか、と、蓬萊の別の研究者が五十年前に提唱した説がある。それが、生物地球論だ」

「バイオテラロジー」

「そう。質量保存の法則を、時間と空間の両方に応用した生物学だ。われわれという存在は、平行世界に無限に存在する。鏡を二つ、平行になれば、そのあいだに立ってみると、何人もの自分、いくつもの別の世界が広がるのを見ることができるようだろう。しかし、私たちにとって現実は一つしかない。鏡に手をのばしたところで、鏡の向こうの林檎を手にとることはできない。しかし、これが、可能なのではないかと、五年前、フェアシュミット賞とヴェネストロム賞をダブル受賞した男がある日思った。われわれは、遭難のケースを細かく分類して研究してきた。ケース1、現実世界と同じ時間軸上の過去へ行く。ケース2、現実世界と違う、平行世界の同時時間、同時刻のその場所へ行く。ケース3、平行世界の過去へ行く。ケース4、平行世界へ行く。ケース4に限っては、異世界といってもいいかもしれない」

ここで、スチュアートは再びテッセンを見た。

「しかし、いずれのケースでも、地球という物質が、たしかに存在

するわけだ。どこにいても、われわれがいるのが地球上であることには変わらない。どうしてか——これだけは覆すことができない。われわれは、この星に縛られて生きている。ここ以外の場所では生きられない。われわれは、地球の一部として、地球の上に起こりうるすべての可能性の世界を行き来している、というだけ。ただ、自分たちに遺伝子という記憶装置があるがゆえに、祖先のいた地に跳躍してしまう、という確率が存在する、というだけで。——われわれは、遭難したとき、その世界での物に手を触れ、持ち帰ることができる。石を一個、こちらの世界へ持ち帰る。ことに、異次元のものを。しかし、それで、何の問題が起こるというわけではない。持ってきたとたんに消滅したりとか、持ってきた記憶がなくなるとかいった混乱もない。通常通り。本も、釘も、メモリディスクも。では、虫は？ 動物は？ 人間といった、生物は？ 問題が起こるだろうか。これが——起きない。それは、地球上のすべての時限、空間で、整合性を地球自身がつっているからだ。地球は、時間と空間のなかで自らの体内の物質——ここでは、われわれ人間のことだ——それを、一つの栄養素や食物のように、自在に動かして、特に異常をきたさない。飲み込んだ水が、体内に吸収されるような自然さでそれを受け入れる。それで彼らは、地球を、宇宙に浮かんでいる一個の生物として考えた。バイオテラロジーとは、かなり端折ったが、簡単に言えば、そういう理論だ。そして、地球に存在するものならすべて、この時限へと持ち帰り、使用することが可能なのではないかと思った」

はつきりいつて、この時点で、テッセンは、目の前の男が何をいっているのか、さっぱり理解できていない。

スチュアートは、エレナとミシェルにむかつて喋る。

「では、虫とか動物とかではなく、次にあげるこれらを持ち帰ることは可能か、と私は考えた。すなわち、燃えさかる火や水だ。地球の別次元に大量にある、たとえば今そこでまさに噴火し、燃え盛っている炎を、炎がそこに在る空間ごとこちらに持ち帰るということ

は？ べつに、持ってきたって問題じゃない。私は、別次元にあるそれらを、資源だと思った。時間軸の中に存在する資源だ。しかもそれは、地球という歴史が続く限り、地球という生物が行き続ける限り無尽蔵だ」

「平行世界の火や水を、私たちの世界が自在に使えるようになるかもしれない、ということですか？」

エレナが、目を輝かせる。

「粒子を操作して、そんなことが可能になる？」

「なる。理論上は。そう——最初、私はそれを、化学で可能にしようとした。異次元から、大量の水素や酸素を持ち帰って化合させれば水になるし、炎は、燃焼という反応だから、と思った。しかしそれでは、時間がかかる。もし、目の前にあのペトルーシユカが居たら、水素や酸素を出現させる、燃やす、水にする、という作業を、一度に、大量に、短時間でこなさなければならぬ。しかし、これでは遅すぎる——いくら私たちが時間を操っても、無事ではすまない。呪文を唱える途中で、敵は待つてはくれないのだからね。出すなら、その“もの”だ。そう、ゲームでは、召還と呼ばれる方法に似ている」

「どうやって？」

「重要になるのは、使い魔の存在だ。かくりよと呼ばれる世界。われわれの世界と重なっており、われわれの脳が新たに知覚した心霊の世界。彼らは一瞬で、主の居場所や状態を知り、われらのもとへやってくる。これもまた、召還の一種といえる。なんでか君たちは使い魔というものを、さしてもものすごいものだとは思っていないようだがね」

「あのう、でも、僕たちは、知らない世界へは容易に行けませんよね？」

ミシエルが言った。

「どこから、そういうものを召還するんです？ その世界にいる、別の——平行世界の僕たちは？」

「だから、まったく異次元から召還するんだよ」

「でも、どうやって取りに行けば」

「それを今、説明するところだ。かくりよというものがあるだろう——われわれの世界と、今重なりあっているその世界。われわれの世界は、まず、そもそも一つではなかった。複数の階層、人間の見ている世と、彼らが生まれ過ぐす世が重なってひとつの世界をなしていることが、粒子の出現でわかった。しかもその重なりは、時間によって非常に不安定で、常に揺らいでいる。その揺らぎの合間に、ワームホールができるわけだが、使い魔たちは、なぜか、その穴に落っこちることはない。彼らには、ワームホールが目に見えるから、そこを迂回することができるわけだ。ところで、使い魔たちは、ワームホールを作り出すほどではないが微量の魔的を持っている。それが、主の魔的情報を蓄積しているから、彼らはいつでも君たちのもとにやってくるができるのだ。彼らは、君たちの使い魔となるとき、それぞれ独自のメソッドで契約をしたはずだ。契約——うん、これも、ファンタジーでは古くからある言葉だね」

「はあ、それで」

「かくりよとこの世界とワームホール。異次元へとつながる穴から、まずはからかくりよへ、炎を召還する。そして、かくりよから、さらにわれわれのもとへその炎を召還する。ここで、使い魔の魔的に導かせれば、それは自動的に君たちのところへやってくる。このやりかたが一番速く、理にかなう、と私は考えて、その方向で実験を重ねてきた。そして、ひとまず安定して炎や水や風や、土くれ——地水火風、魔法の初歩だね——とりあえずこれだけを持ってこれる異次元があることを確認して、そこにマークをつけておいた。はいこれ」

スチュアートは、三人に、巨大な鉄の箱のようなものを、背後からひとつずつとって、渡した。

「なんですか、これ」

「その箱の中に手を入れて、粒子を操作してくれ」

三人は、言われたとおりにした。

「これで、この箱の中には、君たちのパターンを記憶した魔的物質がある、ということになる。さて、これを」

スチュアートは立ち上がると、壁のボタンを押してから、唯一、本棚のないスペースである、別の部屋へと続くドアの向こうに消えた。すぐに戻ってくると、

「これで、私がマークした異次元に、君たちの記憶を持つ粒子が存在する」

と、言った。

「えっ。何か——したんですか」

「この隣の部屋には、ワームホールを人工的に作りだす機械がある。社外秘なので君たちにはお見せできないがね。今、そこに、あの箱をつつこんで転送してきた。間違いなく届いた証拠がこれ」

スチュアートが、一台のモニターを指さす。そこには、複雑な数式や言語が入り乱れている。図形もあつたが、やはり、テッセンには理解できず、他の二人も首をかしげた。コンプリート、という点滅する英字だけが読み取れた。

「で、だ」

「で？」

「今日はこれでおしまい」

「えっ」

三人がびっくりしていると、スチュアートはにっこりと笑って立ち上がり、手を叩いた。

「あとは明日にしよう。君たちは、くれぐれも、何食わぬ顔で生活してくれたまえ。明日の夜、またここへ来てもらう。明日はいよいよ、魔法を使ってもらうよ。では、お楽しみに」

「——帰り道をご案内します」

スリジエが現れた。彼は、三人を廊下に連れ出すと、「ドクターは、今後、君たちとおおっぴらにいるところを極力見られたくないと思っているんだ。君たちのためにもね。明日から、行くと帰りは

私が、さつき入ってきた裏口まで迎えに行くから、来る直前に、学校もしくは、すぐ外の公衆電話からここにコールして」

番号だけが書かれたカードを渡される。テッセンは、それこそ、魔法にかけられたような気分で、黒髪のアジア系の男性を見つめた。「ん？ なにかな。ええと、テッセン——くん」

「いや、べつに」

スリジエの胸には、医療資格者である赤い十字の紋章をつけたピンがあった。検診に来た学生だとカモフラージュする気だな、とテッセンは思った。

「あ！ いやだわ、ハエが」

エレナが、目の前を手で払う。一匹のハエが、廊下を悠々と飛び回っている。潔癖症らしく、彼女は眉をひそめる。

「普通のハエだね。ならべつに」

スリジエが気にしたのは、虫の形をしたスパイ機器が、一時期横行したためだ。しかし、それは、ごく普通のハエだった。テッセンは、

「あんたになら、蝶か花のほうが似合うだろうにな」

エレナに向かって言った。突然の褒め言葉に、おさげを揺らして振り返ったエレナだけでなく、ミシエルまでがきよとした顔になる。

「え？」

「なんでもない」

三人は、スリジエについて、研究所の外に出た。彼が導いてくれるルートが、カメラの届かない場所だということに、テッセンは気付く。

表玄関には、まだ、警察関係者たちがいるらしい。風にのって、声が聞こえた。

近くの公園まで送られたあと、三人は別れた。テッセンとミシエルは、寄宿舎へ。エレナは、ホストファミリーの待つ家へ。

ミシエルが、友人と外で夕食をとる、というので別れたあと、テ

ッセンは深くため息をつき、舗装された道路の上に立ち止まった。

一人になって、ほっとしている自分に気付く。

街灯が明るく、彼の影を路上に三重写しにしていた。

「面白いものは見られたか？」

答えはない。

しかし、間違いないことを、彼は確信した。

その証拠に、テッセンが歩き出すと、羽音をさせて、一匹のハエがついてきた。

テッセンの下宿は、市が借り上げて提供している、アパートメントの一室である。オールドアメリカンの外見を持つレンガづくりの建物。その一棟で、テッセンを含む平安市からの留学生が暮らしていた。年も専攻も異なる四人で、全員が男である。

彼が帰宅したとき、蓬萊大学に通うキクノスケと高等部三年のアツロウは、すでに夕食をすませて自室にひきあげていた。中等部二年のシゲキは、今晚は留守にしますという書置きをテーブルに残している。誰も居ないことにほっとしながら、テッセンはダイニングに入った。

洋装にはいまだに慣れない。浴衣に着替えて帯をしめると、ようやく腰がすわった気持ちになる。ミネラル入りのお茶のカップを持って、ダイニングから移動する。今晚は自分の部屋に閉じこもりうと、彼は、部屋に鍵をかけた。今日のできことを先輩たちに話すことなどとてもできなかった。個人主義のゲットーらしく、いずれの部屋にも、立派な鍵がついているのがありがたい。

「雪は真っ白、桜は血色」

大きく音程を外したが、歌をくちずさんで窓を開ける。ハエではなく、一匹のバツタが、二階にあるその一室の窓枠に飛び乗ってきた。まばたきのない緑の目をぎょろりと彼に向ける。

それを意識しながら、彼はベッドに寝転がる。

この、奇妙な感じ。

ホームシックとも違う、母への追慕とも違う、梅雨の空に、突然雲が割れて日光が差し込むような淡い気持ち。

スリジエからもらった契約書を、ベッドの下の鞆に手を伸ばして、摘み上げる。

「口外を禁ず。筆記を禁ず。使い魔への感応による示唆等、関係者外への漏洩は、その怖れのある行為を含めて一切を禁止し、得た情報に対しては当方の許可なく個人的見解の保持を禁ず。――」

スリジエは、ごていねいに、日本語の契約書まで用意していた。報酬が破格なのがにくい。明日、その気があるならサインをしておかなければならない。

テッセンが黙っていると、バツタは、彼のプライヴェートまで邪魔はしないよ、というように、一度だけ空中に垂直に飛び上がり、去っていった。意地が邪魔して、行くなよ、とも言えない。

額に手の甲をあて、高い天井を見る。

――上天氣の五月だった。

留学する前、彼がサヨラに会いにいったのは。父親への義理ではなかった。その日、彼は、正式な破談に先駆けて、本人に直接断りに行ったのである。

「ああ。……くそっ」

明日から本格的になる『魔法を現実にする実験』というものについて、ちゃんと考えなくてはならないはずなのに、彼が今思い出すのは、婚約者になるかもしれない少女のことである。

「ここは私の終の棲家じゃ――」

歌を口ずさみながら、ごろりと寝返りを打つ。打ち消そうとすればするほど、その日の光景が脳裏にまざまざとよみがえる。

平安市の北東部には、黒々とした森が茂っている。人が立ち入らないその森は、全域にわたって、僧侶、神官、修験道者の修行場となっている。山全体が神域だった。

ふもとからなだらかに傾斜して、高さは五百メートルにも満たない。気楽に上れそうな登山道もある。いかにも行楽にうつてつけ――しかし、誰も近寄ろうとしないのは、このあたりが鬼門だからというわけではないが、たちのわるいゴーストや、獣精がよく出るからだ。

円城寺サヨラは奇矯にも、そこで一人で暮らしていた。修行場へ

つながる山道の中腹から、枝分かれした細い道の先に、一軒の庵がある。すぐそばには、小さな泉があった。泉は、石灰岩が風化し、地盤が地下に崩落してできた穴が、長い年月を経て苔むし、清水が湧いてできたものだ。獣たちの水のみ場となっている。

五月の良い天気の後だった。先方の指定を無視して時刻前にそこへ着いた彼は、気まぐれで、庵の玄関先を尋ねるより先に、泉へ下る道をおりてしまった。そして、そこで、少女と、数年ぶりの再会を果たしたのだった。

「あら」

その人物は、着衣のまま、泉に腿までつかって桶に水を汲んでいた。ちょうどいい気候だとはいえ、寒々しい姿で少女が振り向いたとき、おいおい想像と違うぞ、というのが、彼が最初に思ったことだった。人の死にかこつけて呼び出すような女だから、いやな奴だろうと予想したのだ。自分より先に高等部まで出ているからには、こまっしやくれて、高飛車で——ミサビに告げたサヨラ像は、彼が想像で作り出した人格だったといってもいい。本当は、彼女に関して、テッセンは何も覚えていなかった。

「テッセンさま？」

しかしそこにいたのは、まるつきり、まだ子どもっぽい少女だった。驚いて立ち止まった彼に向かって、困ったように微笑んで、申し訳なさそうにテッセンの足元に視線を送った。

「ああ——、失礼」

彼は、足元に、畳まれた上着と手ぬぐい、下駄を見つけて、あわてて体ごと反転した。サヨラが水をかきわけて砂地にあがり、身支度を整えるのを待った。

「ようこそいらっしやいました。わざわざお呼びたてした無礼をお許してください」

年齢につりあった、やや舌足らずな声に振り向くと、紺紵の着物に細い帯を締めて、彼より頭二つ分小柄な少女が頭をさげていた。簡潔なその服装が、華奢な子どもっぽい体の線をあらわにした。円

城寺家の箱入り娘とはとうてい思えなかった。手にさげた桶には、枇杷と夏みかんが、ずっしりと水に沈んでいる。

「午後には波が変わるのですが、すっかり失念しておりまして。おかげで、冷やしておいたものが、桶からこぼれて、ずいぶん遠くに――」

「貸せ」

重そうに水をたたえた桶をひったくるように奪ったのは、何度もシミュレーションした対面の口上が使えなくなったことで、間がもたない、と判断したためである。サヨラは単純に「ありがとうございます」と礼を言った。

庵にあがると、奥の座敷に通された。サヨラは、お茶と、きれいに剥かれた果物の盆を持ってきた。

「お待ちいただけるなら、着替えて参りますが――お見苦しいところを」

拭いただけでまとめた髪から、ときおり雫がおちるが、まったく気にしない様子で、ひとと、指先をそろえた手を膝の前について頭を下げる。

「お久しぶりにお目にかかります。円城寺サヨラでございます」

指定された時刻より前に来て相手の虚をつき、要望を飲ませてさつさと帰るつもりが、逆に虚をつかれた形になって、テッセンは内心、弱りきっていた。日を改めることを考えたが、留学前の挨拶回りや事前研修などがあることを考えると、今日しかない。気を取り直して茶碗を置くと、彼は切り出した。

「藤原テッセンです。単刀直入に申し上げます。縁談の件ですが」

「はい。――あの、申し訳ありません」

顔をあげたサヨラは青ざめていた。黒い髪の一筋が、首もとに落ちた。

「形だけのことなど――恐れ多くも藤原家にむかって、あまりにも無茶を申しました。さぞお怒りでしょう」

「形――だけ？」

「兄が亡くなつて、私をどうにか家に戻そうと、父が策を打つたと、あのこたちが――」

「待て。どういうことだ」

「はあ」

きょとんと顔をあげたサヨラは、不思議そうな顔をしていたが、やがて、頬を赤らめてうつむいた。テッセンが聞き出したところによると、突如現れた二人の縁談話の顛末は、こういうことである。

「タヌキどもめ」

テッセンは激怒した。

「すみません」

深々と頭を下げたサヨラいわく、円城寺家の嫡男であるミサオが事故死してからというものの、跡取りとしてサヨラが家に帰ってくることを、彼らの両親は切望し、時には、それは命令に近いものとなつたという。しかし、サヨラは家を出た身だつた。彼女の性格と体調上の理由が、このわびしいひとり住まいだつたのだが、すっかりこの生活に慣れた彼女は、今さら街へ戻ることが嫌で嫌でたまらない。兄が死んだから自分なのか、という思いもあつた。ふさぎこんでいたところに、しかし、父親からの使い魔が、妥協案を持つてきた。

サヨラがここで生活をしている理由は、けして、人が嫌いとか世俗は穢れているから、ということではない。あくまでも、仕方なくここに住んでいる、というだけなのだ。だからこそだろう、人一倍、彼女には、外の世界への強い憧れがあつた。「本当は、街で暮らせたらいちばんいい、とは思います」――消えそうな言葉通り、座敷の隅の本棚には、流行の雑誌があつたし、床の間には、西洋絵画のレプリカや清朝の壺やら、舶来の帆船の模型などがあつた。すべて家族や友人からお土産としてもらったものだという。

彼女は、特に、外国というものに憧れていた。父親が目をつけたのは、そこだつた。

「そこで暮らしたいなら暮らせばいい。だが、藤原家の末弟が、今

度、蓬萊市へ留学する。最近聞いたのだが、末子とはいえ藤原家の本流、帰国したら縁談が決まっているとかなんとか。その前に、お前と会ってもらうように、当主に私がねじこんだ。一度でいい。一度だけ、ちゃんと帰ってきて、送別会に顔を出せ、でなければこれつきりになるぞ」――

「それで、一度家に帰ってその会に顔を出したら最後、私はここに戻してもらえなくなるだろうって、そういう考えなのだって――その、この子たちが（と、彼女は、そばに飛んできた蝶々をさした）。それで、その――父は、そちらのお父様にも頼んだのだそうです。形だけでもいいから、その気にさせて欲しいと。父と貴方のお父様、お二人は友人同士ですから。それで」

「じゃあ――この話は」

「すべて、私を家に戻すためです。私が昔、外国を見てみたい、よそのゲッターを見てみたい、と言っていたのを、父は覚えていたのだと思います。貴方が蓬萊にいらっしゃる、ということ、何かお話して――お帰りになったかどうか、あちらで見聞きしたものについてお話をしにきて、と頼むとか、そういうことなら、ぜひ来るだろうと思っただけでしょう。それに――テッセン様と、他のどなたかとの縁談がまとまった、というなら――」

沈黙がおちた。

彼女の横には、黒い揚羽蝶が三匹、ひらひらと空中を飛んでいる。「覚えておいでではないでしょうか」

彼女は、庭のほうに目をうつして呟いた。開け放たれた縁から、深い緑と泉の水面が見えた。

「昔、藤原様のお宅の御慶の会で、テッセン様にお会いしました」
彼女が飛びぬけていたのは知能だけではなかった。彼女は、強すぎる精神感応力を持っていた。それは、粒子操作にはむかなかったが、ゴーストや、かくりよのものたちと渡り合うにはうってつけの能力だった。ゲッターで育った人間のなかには、まれに、彼女のように、現世でいわれる、いわゆる霊能者とか霊媒とか、シャーマン

と呼ばれるようなものがいて、円城寺サヨラもそのひとりだった。彼女は特に、小さいものの声をよく聞いた。弱い精霊、弱い魂。弱い虫たち、といったもの。虫たちを、使い魔を持たない平安市の人間に、使い魔のように使えるよう仕込みを行って、月いくらで貸す——いわば、虫たちの派遣業務で、今は生計をたてていた。若くして独立できたのも、このおかげである。学業の修了を急いだのは、ともすると心があちら側にいきがちで、虫に囲まれて暮らす自分への世間の目が厳しく、街での生活が辛くなってきたから。じぶんが出て、円城寺家には兄がいるから大丈夫だと信じていた。

しかし、思い残すことのない街の生活にも、ひとつだけ、未練があった。

前述の御慶の宴会で、所在無い彼女が、自分の能力を恥じて壁際でふさぎこんでいたとき、一人の無愛想な少年が、彼女に、ジューズのグラスを差し出して、「気分が悪いなら、あつちで寝てろよ」と、手をひいて別室へと送ってくれた。おそらく、その少年は、彼女の能力を知らなかったたのである。虫に囲まれた不気味な子、人の考えを読むいやらしい子、というのが、そのころの彼女の評判だったから。躊躇なく手を引いて、「熱くはねえな」と額に額をあてソファに座らせ、どこからか毛布まで出してくれた。知らないのだろう、と彼女は思った。知らないのだ、だからなのだ——しかし、どうしても、その“無愛想で優しい”少年が忘れられなかった。

「私は、今は自分の力をコントロールできます。メデイテーションや、離魂術や、そういったものの組み合わせで、虫や動物や人間の魂の区別がつかなかったころのように、のべつまくなしに、触ったりすれ違ったりした他人様の考えを読むということはありません。しかし、その当時は——この、ひとの心を読むという力ゆえに、父は私を、外交官にむいているとして溺愛しました。今もつてなお、私を家に戻そうとしているのがいい証拠です。幼少時代の、じぶんでも恐ろしくなるほどのあの状態を、父は忘れられないのです。ですが、おかげで兄には申し訳ないことを——兄は、私を妹にもった

がゆえに、無茶をせざるを得なかった。何をするにも、まず妹の私順序が違つと何度も申し上げたけれど、父は聞く耳を持たなかった。兄はどんどん、私と父から離れていった。私が必要に駆られて取り組んだ勉強を、父がなおさら褒めたものですから、余計にそれが、お兄さまには齒がゆかった——そう、いつも感じました——だから、

「ああ、それですか。勉強ばかりしてるなと思ったよ」

「私のせいなのです」

「いや、お前のせいじゃないだろう。ミサオは、じゅうぶん優秀だったよ。お前だつてやることをやつただけだ。親父のほうが悪い」

「と、今なら私もいえますが——当時は」

サヨラは、苦笑した。

「——テッセンさまが、今日、来てくださつてよかった。兄のことを書けば、いらして下さると思ひました——優しいおかたですからとにかく、そのパーティーで——私を助けてくれたのが、のちに、藤原家の末の息子さんだとお聞きしてから、ずっと……私——だから、」

先は途切れたが、さすがに、無頼漢のテッセンにも悟ることができた。

「まさか、なあ」

天をあおぐ。何を話しにきたのか、そのとき、テッセンはすっかり忘れていたのだが、

「はい……、すみません。大変なご迷惑をおかけしました」

「べつに、そういうわけなら、迷惑とは」

「いいえ」

サヨラは恥じ入るばかりだった。その様子を見てみると、テッセンの心にも、妙な感覚が湧いてくる。ふと、彼女の乾いて解けかかった髪が衿から滑り落ちて、胸元まで流れた。細い指先でそれを払う。小づくりのあどけない顔。幼いな、というのが彼の感想だ。しかも、それなのに、聞き分けがよすぎる。外見と年齢のつりあい

とれていない痛々しさに、テッセンは胸をうたれた。

ああまでミサオが自分を敵視していた理由も、すんと飲み込めた。弟ならまだ諦めがつく。しかし、こんな妹がいたら——しかも、そいつが、自分と正反対の、天敵ともいえる無法な乱暴者に憧憬を抱いているとしたら。

サヨラは「申し訳ありませんでした」と、嘘の縁談話についてひたすら謝った。

「私は、もう、ここを出るつもりはありません。円城寺家とは縁を切って、山を降りることはもうないでしょう。貴方さまとも、もう、これきりに。ですから、どうか、今度のことは、どうかご勘弁を」

「ここは私の終の棲家じゃ——か」

ふと、泉におりたときに少女が歌っていた歌の一節が、テッセンの口からもれると、サヨラは顔をあげた。

「本当に、お前、ここにずっといるのか？」

その年で、ひとりきりに慣れて一生、と彼が、眉間にしわを寄せて尋ねると、覚悟した表情でうなづく。

「もう慣れました。あの、円城寺家の変わったお嬢さん、という目で見られるよりは、ずいぶん楽ですもの。もう、あんな思いはいや。ここは本当に、私によく合っています。この子達を使いに出せば、なじみの店から、入用のものは届けていただけますし」

「家は。——帰る気がないとするなら、どうするつもりだ」

「私も兄も養子でした。これからでも、もつと相應しいお子さまがいくらでも見つかるでしょう。外交官の跡継ぎに向いたお子が。育てていただいたご恩がありますが——父のことです。もう、めぼしはつけていると思います」

「夢は？ 外国を見たくはないのか。外には、面白いものがたくさんあると思うぞ」

テッセンが、床の間に視線を向けると、はじめてサヨラは悲しげな顔をしたが、黙って首を振る。

「いいんです。それは……見られたらいいと思いますけれど」

「せつかくこうして出向いたんだ。わがままを言つなら、赤の他人に限る」

彼は立ち上がり、縁側に出た。泉の上に、鳥が羽ばたいている。

木漏れ日が、小さな庭にさした。

「虫はどこにでもいるだろう。外国にも、どこにも」

「それは、そうですが……？」

「俺は、お前のその、虫どもと通じる能力がどの程度かはわからないが。誰か、いい、という奴がいれば、そいつの魂のどっかに結び付けて、虫と視界をリンクしたりできるんだろう。そういうことができる、と聞いている。俺は、蓬萊に行く。お前、本当に、こんなチャンスを逃す気か？——俺は、こう見えても、病人と十年暮らした。身動きできないものの頼みは、聞きなれてる。せつかくここまで来たんだから、ついでだよ。乗りかかった船だ。これも、なにかの縁もう一度言うが——見たくないのか」

しばらく黙ったあと、サヨラは目を見開いて、テッセンを見上げた。ほの暗い座敷に正座した少女の体が、その瞬間、かすかに震えた。

「見たい——です」

庭の木には、虫たちの餌箱がかけてあった。虫愛する姫の静かな日々が想像できる。

どんなに質素な暮らしをしていても、この少女は高貴だ、とテッセンは思った。姫君と呼ばれるのに相應しい。けして美人とはいえないが、いたいけで、控えめなところが、いじらしい。おそろしく自制ができている。言葉のはしから感じられる頭のよさもいい。頭のいい異性をかわいいと思ったのははじめてのことである。

テッセンは、庭を見たまま、振り向くことができなかった。自分がどんな顔をしているのか、自分でわからなかったのだ。ただ、猛烈に妙な気分だった、というのだけは言える。

「見せてやるよ」

それが、リヒトに感じる兄貴心と同じものだと、そのとき彼は思

ったのだが、その後、話を聞いたリヒトとミサビは、どうだかねえ、と笑って肩をすくめた。

そういうわけで、蓬萊で、彼は完全に一人きりではなかった。虫に魂を預ける、というやりかたで、蓬萊じゅうを彼と見ているものがいた。

絶対に口外してはならない魔法の諸々も、だから、彼女は知っていたわけである。

「かくりよのものにも種類がある。現世で元、獣や人だったものが、死んだ後に何らかの作用によってかくりよに導かれ、そこでまた人や獣のかたちをとる。彼らの姿は非常に不安定で、自らの魂の記憶やイメージによって、ひとまず形をとどめていはいるが、基本的には魂のみの存在である。なぜか、彼らのあいだだけでは、英語とかフランス語とか日本語などの言語感覚が消失され、私たちには理解できない共通語や、テレパシーで意思の疎通を行う。そして、人間と契約をすると、主人の使用言語をあつという間にコピーして、主と同じ言葉を喋り始め、主が好む動物やものの形をとる。いわゆる、超能力だ。そして、彼らは人間と契約することで、人間の世界と自分たちの世界を自由に行き来できるようになる。彼らにはまた、時間と空間の境界があいまいだ。呼ぶものがいれば、ただちに、そのものの元へ駆けつける。異界から、炎や水を召還するには、彼らの手助けが不可欠。そのために、君たちには、いちど、かくりよというものを体験してもらわなければならない。魂だけになって」

「その——訓練は、かなり高度なはずですが」

エレナが首をかしげると、スチュアートはうなずいた。

二日目の講義を、彼らは受けている途中である。スチュアートの居室は、その日も乱雑だった。

「言われたとおり、使い魔を連れてきてくれたかね」

「あ、はい」

彼らが呼ぶと、それぞれの相棒が、姿を現す。ミシエルの相棒は黄金の毛並みの大型犬で、エレナの相棒は、目の大きな子鹿だった。テッセンはいうまでもなく、黄色に風切羽の一筋だけが赤いカナリア、アルリシャである。

「鳥かあ——」

スチュアートはがっかりした顔をした。

「鳥だとなにか問題が？」

むっとしながらテッセンが問い返すと、

「体の小ささは単純に、力の大きさだ。さらに、食物連鎖の上位にいる動物の姿を取れるほど、使い魔の能力は高い。君が、手紙のやりとり専用で、その小鳥ちゃんを使っている、というのなら納得するがねえ」

スチュアートは額に手をあて、やれやれというようにため息をつく。

「あんた何様や！？　うちのぼんに余計なこと吹き込んだら承知せえへんどお」

タエコの影響で、妙な関西弁を喋るようになったアルリシャが、甲高い声で叫ぶ。スチュアートは肩をすくめるだけだった。さしもの天才も、日本語の、地方言語まではカバーしていないのだ。テッセンは「落ち着け」と言ったが、しばらくアルリシャはぷりぷりと怒っていた。

「まあいい。とにかく、だ。いきなり君たちに幽体離脱しろともいえないから、こちらで用意した。スリジエ、配って」

「かしこまりました」

「なんですか、これ」

渡されたのは、カチューシャのような金属の板である。さらに、黒い輪っかのようなものが四個ずつ。

「頭と手足にはめる。それは、君たちの魂と魄を一時的に分離させるものだ」

「ここで、ですか。死にませんか？　素人がへたにやっちゃいけないって習いましたけど」

「専門外だな」

と、スチュアートは肩をすくめた。

「心臓や脳の状態はこちらでもモニターしてるから、大丈夫。こっち

だよ」

スリジエが苦笑した。スリジエのほうがよほど頼りになる、と三人は思った。今日の彼は、全身に白いスーツを着て、頭も滅菌カバ―で覆われている。彼の先導で別室に移動すると、「服の上からでいいから、これを着てね」と、狭い小部屋で、黒いゴミ袋のようなものを渡される。頭を出す穴のある、長いマントのようなものだった。

黒いてるてるぼうずと化して、三人は部屋に入った。そこは、医療関係の器具が並んで、ベッドが三つ用意されている。手術室のようにも見える。

カチューシャと腕輪、足輪を装着して三人がベッドに横になるとスリジエが、大きな機械の前に立って、何かを操作し始めた。

「呼吸を整えます。ガイダンスが頭の中に聞こえると思うので、そのとおりに、ゆっくり、ゆっくり――」

これは、検診でも経験がある作業だ。三人は、すんなりと、半覚醒の状態に入る。普通は、ここで、脳波や心音をチェックして終わる。しかし、今回はその先があった。

「じゃあ、経穴との連結解除します。手足が冷たくなるけど、動揺しないで。そのあと、引かれる感覚があると思うけど、がんばってその場にとどまるように。けっこう衝撃を感じるかもしれない、覚悟して――1、2、3――」

次の瞬間、テッセンは幽霊になっていた。正式には、幽離体、とよばれるもので、魂だけがハクの外に飛び出した状態である。隣には、色彩をなくしたミシエルとエレナが、彼と同じように浮かび上がっている。

「この状態で、使い魔たちを呼んで」

「――“アルリシャ”」

「はいな。あ――！ ぼん、なんや、私と一緒にあったなア」

アルリシャが飛んできて、嬉しそうに言った。幽離体の彼に触れると、彼女の輪郭が、やわやわと溶けはじめ。やがて、カナリア

の姿は消えて、彼女は、魂だけ——にじみそうな玉のようになる。それは、手のひらに乗るほどの黄色い温かな光だった。

初めて会ったときを思い出す。

まだ、彼が4つか5つの子どもだったとき、縁側で空を見上げていたら、不思議な光が飛んできて、目の前の老松の枝にとまった。それが何と呼ばれるものかも理解していなかったテッセンだが、不思議と、その光は怖くはなかった。ゲットーへ移り住んで来たばかりの道祖神と、出生から波乱の船出をしていた子ども。彼女が言葉を理解するやいなや、ひとりの子どもと一つの魂は、すぐに打ち解けた。こういう契約のしかたをしたのかも覚えていないが、そのくらいすんなりと、アルリシャとテッセンは仲良くなった。

「“ やっぱ、お前が俺の相棒だよなあ。間違いないな”」

「そうやあ。うちが、ぼんのツレやさかいな！」

その声は、遠く近く、粒子の揺らぎのなかから聞こえた。魂だけになると、お互いがどんなに近しいかわかる。

ミシエルは、大きな白い光に全体が見えないほど包まれ、エレナは、胸いっぱい青い光を抱きしめている。テッセンの光はささやかだったが、彼は満足していた。

——鳥の形しかとれないほど、アルリシャが精霊として下位でも、やっぱり、俺にはこいつが一番あつて。

その、テッセンの様子を、少し苛立たしげに、カメラを通じて、別室からスチュアートは見ていた。

「いかな。あれじゃ、たかが知れてる」

「まだまだ、これからですよ」

インカムにむかって、スリジエは答えた。

「さて、おさんかた。聞こえるかな。それから、使い魔のかたがた」スチュアートの声は、別室から、マイクを通じてもたらされる。

三人は、いつせいにスピーカーを見上げる。

「——はい」

「今から、使い魔の魂のなかで、粒子操作してもらおう」

「えっ」

“そんなことして、大丈夫ですか”

「大丈夫だよ」

本当か、と三人はスリジエを見た。スリジエはうなずくばかりだ。再び、スチュアートの声。

「と、同時に、異世界の——ひとまず今日は、炎を——君たちの粒子と結びつけたものを、使い魔に記憶してもらう。君たちの使い魔の能力の範囲内の炎だ。これは、本物の炎ではなく、炎の幻影といっているかな。かくりよの炎だから、現実の肉体とつながっている君たちは、何も感じないはずだ。ではいくよ。スリジエ、いいかい」
「大丈夫です」

「では。カウントのあとで、操作してくれたまえ。——3、2、1、ゴウ」

テッセンはいうとおりにした。しかし、その瞬間、すさまじい悲鳴が使い魔たちからあがる。アルリシャも例外ではなかった。彼女の魂が、はじけそうに震え、テッセンの手の上でのたうちまわる。

「いやあ！ やだ！ 熱いよう、ぼん、ぼん！ 何やこれ、やめてや！ いややあ！」

「おい——スチュアート！ 何だこれ——アーシャ！」

「いやや、熱つつい、お願い、やめて、やめて！」

「——アーシャ——！」

止めなくては、と思った瞬間、テッセンは、自分の体に戻っていた。起き上がって、空中をふらふらと漂うアルリシャの光を、あわてて手のひらで捕まえる。彼女は、カナリアの姿をとらなかった。光はいつもの輝きをやめ、ぜえぜえと息を切らすように点滅する。
「どういうことだ！？」

「君の能力と、使い魔の能力がつりあってないんだよ」

冷たい声がスピーカーから降ってくる。

「他の二人を見ればいい。たしかに、使い魔は少しは苦痛を感じるはずだが、君ほどじゃない。君の力なら、うん、もっと大きな炎を

出せるはずだよ。だけど、使い魔がそれを受けきれないんだね」

テッセンを見ると、ミシエルとエレナは、心配そうな顔をしているものの、彼らの使い魔の光はなんともなっていない。

「まったく——ねえ、君、なんでそんなのが相棒なの？」

心底がっかりしたような声。他の二人も、幽離体のまま、気の毒そうな顔で、テッセンを見ている。そうやって、お前の使い魔は弱い、と突きつけられることは、苦痛だった。テッセンのプライドを刺激した。

「弱くてなにが悪い」

しかし、テッセンがアルリシャに求めたものは、そもそも、強さではないのだ。今後、さらに彼女を傷つけるとしたら、腹は決まっている。

「冗談じゃねえぞ。俺はおりる」

テッセンは、アルリシャを手に抱えて、黒い上着を脱ぐ。ベッドを降りようとすると、スリジエが「だめだ」と、横から言った。

「契約破棄は認められない」

「じゃあ——じゃあ、どうしろっていうんだ。こんなことを続けたら、アルリシャが消えちまう！」

曖昧な気持ちでサインしたことを、彼は後悔した。

「だけどねえ」

「だけどじゃねえ！」

「ぼん——うち、うち、大丈夫や……」

言ったのは、アルリシャだった。あわてて手のひらに目を落とす。やんわりと、右半分だけ、彼女はカナリアの姿をとりはじめていた。「うち、大丈夫や。あんなん、ちよつとびっくりしただけや。心の準備しとかなあかんかってん。大丈夫や。ぼん……」

「どこが大丈夫だ。駄目だ。もう終わり」

「そんなに心配なら、別の手もあるよ。君の力を削る方法だけど」「え？」

やれやれ、という声がスピーカーから降った。

「召還に使う君の粒子を抑制する。使える魔法の威力は、そのかわり、ぐつと弱くなるけど？」

「それをはじめからやれ！」

拳を叩きつけるかわりに、彼は叫んだ。アルリシヤは、大丈夫、というように、片羽だけで羽ばたいて、宙に浮かび上がり、彼の顔に顔を寄せる。

「ええんや。うちがんばるさかい。な、ぼん。そんな、怒ったり悲しんだりせんとつて。あかんわよ、そんな、ぐるぐる、万華鏡みたいに心の模様変えとつたら。寿命縮んでまうよ？　なあ？　うちは大丈夫や。なんてことないわ、これしき。なあ、ここがんばったら、ぼん、もっと強うなれるんやろ……」

「——お前はそんなこと考えなくていい」

彼は言ったが、アルリシヤがそれを聞いたかは、わからなかった。二日目は、それで終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5455y/>

ゲッター？ 蓬莱幻想

2011年12月2日16時01分発行